

平安京右京六条一坊十四町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊十四町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、建物新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 21 年 6 月

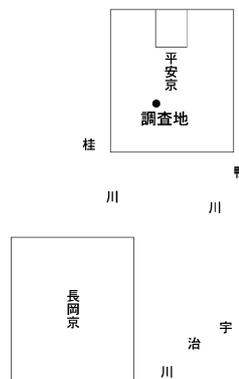
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京六条一坊十四町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区中堂寺粟田町地内
- 3 委 託 者 株式会社アーバネックス 代表取締役社長 鈴間能成
- 4 調査期間 2008年10月3日～2009年3月19日
- 5 調査面積 約1,950㎡（1区972㎡、2区918㎡、3区60㎡）
- 6 調査担当者 南 孝雄・南出俊彦・モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
XF 5・7次調査は日本測地系（改正前）の座標値を世界測地系に変換した。
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 挿図順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。参考に既往調査の出土遺物も一部掲載した。1～39は今回調査、40～54はXF 7次調査、55～61はXF 5次調査の出土遺物である。
- 13 本書作成 南 孝雄・モンペティ恭代
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 自然化学分析は（株）パリノサーヴェイに委託した。
- 16 調査中また整理作業中、以下の方々より様々なご教示を頂いた。記して謝意を表します。（五十音順／敬称略）

高 正 龍（立命館大学）、嵯峨井建（賀茂御祖神社）、
鈴木久男（京都産業大学）、清野孝之（文化庁）、西
山良平（京都大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資
料館）、三好孝一（大阪府文化財センター）



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査の経緯	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 弥生時代の遺構	7
(4) 平安時代の遺構	7
(5) 室町時代の遺構	20
4. 遺 物	23
(1) 遺物の概要	23
(2) 土器	23
(3) 瓦	26
(4) 鉄製品	26
5. ま と め	27
(1) 弥生時代	27
(2) 平安時代前期から中期	29
(3) 平安時代後期から室町時代	37
6. 付章 自然科学分析	40
(1) 調査地点	40
(2) 試料	42
(3) 分析方法	42
(4) 結果	45
(5) 考察	53

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（南西から）
図版2	遺構	1	1区全景（北から）

- 2 2区全景（西から）
- 図版3 遺構 1 建物1・2（東から）
2 建物1・2（北から）
- 図版4 遺構 1 建物3、門1・2（東から）
2 建物3根石検出状況（南から）
- 図版5 遺構 1 建物4（北西から）
2 建物5（北から）
- 図版6 遺構 1 門1（南東から）
2 門2（南東から）
- 図版7 遺構 1 門3（西から）
2 建物6、柵1（東から）
3 柵2（西から）
- 図版8 遺構 1 建物3柱穴56根石検出状況（南東から）
2 建物3柱穴52根石検出状況（西から）
3 建物4柱穴41・49半截状況（南から）
4 建物5柱穴157半截状況（南から）
- 図版9 遺構 1 溝36（北から）
2 溝37（北東から）
3 溝95（南東から）
4 落込み190（南東から）
- 図版10 遺構 1 土坑94漆器椀出土状況（北から）
2 土坑94杵材痕跡断割（南から）
3 溝192・193（西から）
4 溝192・193断面（東から）
- 図版11 遺物 1 平安時代出土土器
2 平安時代後期・室町時代出土土器
- 図版12 参考 1 XF7次調査SD180（北東から）
2 XF7次調査SD180堰（北東から）
- 図版13 参考 1 XF7次調査SB5（北西から）
2 XF7次調査SX11（P146）礎板検出状況（東から）
3 XF5次調査SE13（西から）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	調査前全景 (北東から)	2
図 4	作業風景	2
図 5	平安京地形分類図	3
図 6	遺構平面図 (1 : 300)	6
図 7	建物 1 実測図 (1 : 60)	8
図 8	建物 2 実測図 (1 : 60)	9
図 9	建物 3 実測図 (1 : 60)	10
図 10	建物 3 根石検出状況実測図 (1 : 60)	11
図 11	建物 4 実測図 (1 : 60)	13
図 12	建物 5 実測図 (1 : 60)	14
図 13	建物 6 実測図 (1 : 60)	15
図 14	門 1 ~ 3 実測図 (1 : 60)	16
図 15	柵 1 ・ 2 実測図 (1 : 80)	17
図 16	溝 36 ・ 37 ・ 95 ・ 191、落込み 190 断面図 (1 : 40)	19
図 17	土坑 17 ・ 87 ・ 94 ・ 170 実測図、溝 132 ・ 137 ・ 192 ~ 194 断面図 (1 : 40)	21
図 18	平安時代出土土器実測図 (1 : 4)	24
図 19	平安時代後期・室町時代出土土器実測図 (1 : 4)	24
図 20	瓦拓影・実測図 (1 : 4)	25
図 21	蹄鉄実測図 (1 : 4)	25
図 22	XF 7 次調査弥生時代遺構平面図 (1 : 300)	28
図 23	XF 7 次調査 SD180 断面図 (1 : 40)	29
図 24	右京六条一坊十四町平安時代遺構配置図 (1 : 800)	30
図 25	XF10 次調査 SD34、XF21 次調査溝 95 断面図 (1 : 200)	31
図 26	XF 7 次調査平安時代遺構平面図 (1 : 300)	32
図 27	XF 7 次調査出土土器実測図 (1 : 4)	33
図 28	右京六条一坊十四町東半部遺構変遷図 (1 : 1,200)	34
図 29	XF 7 次調査 SB 7 柱穴出土小型瓦拓影・実測図 (1 : 4)	36
図 30	XF 7 次調査 SB 7 柱穴出土小型瓦	36

図 31	XF 5次調査 SE13 実測図 (1 : 40)	37
図 32	XF 5次調査 SE13 出土土器実測図 (1 : 4)	37
図 33	調査地点の位置および層序・分析層準	41
図 34	主要珪藻化石群集の層位分布	47
図 35	花粉化石群集の層位分布	50
図 36	植物珪酸体群集の層位分布	51
図 37	珪藻化石	58
図 38	花粉化石	59
図 39	植物珪酸体	60

表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	23
表 3	右京六条一坊十四町建物一覧表	35
表 4	珪藻化石の生態性区分と環境指標種群	43
表 5	放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果	45
表 6	珪藻分析結果	46
表 7	花粉分析結果	49
表 8	植物珪酸体分析結果	52

平安京右京六条一坊十四町跡

1. 調査の経緯

今回の調査は、京都リサーチパーク9号館新築工事に伴って実施したものである。

調査地は、平安京右京六条一坊十四町にあたる。調査前は駐車場、それ以前の昭和40年代までは、大阪ガスの都市ガス工場として長く利用されていた。しかし、ガス配給の方法が大阪からのパイプライン完成によって変わり、昭和60年代からビル建設用地に変化する。これ以降、調査地周辺では、ビル建設または区画整理・五条通（国道9号線）拡幅工事などに伴い、継続して発掘調査が行われることとなり、平安京内でも最も調査の進んでいる地域となった。その範囲は、五条通から南側約300m、JR嵯峨野線から西側約500mまでの範囲である。平安京の条坊では、右京六条一坊三・四・五・六・十一・十二・十三・十四町にあたる。昭和62年に五町で行われた調査を1次調査とし、今回で21次調査となる。なお、当研究所ではこの範囲で行われた調査に対して、調査記号としてXFを用いている。

調査地は、平成4年度実施調査（XF7次調査-3区）、平成6年度調査（XF10次調査-1区）、平成7年度調査（XF11次調査-1～4区）に囲まれた区域にあたり、今回の調査を合わせると十四町の半分以上を調査したことになる。調査区の平面形は逆L字形を呈し、南北方向に長い南半部を1区、東西方向に長い北半部を2区として、1区から順に調査を行った。さらに2区の調

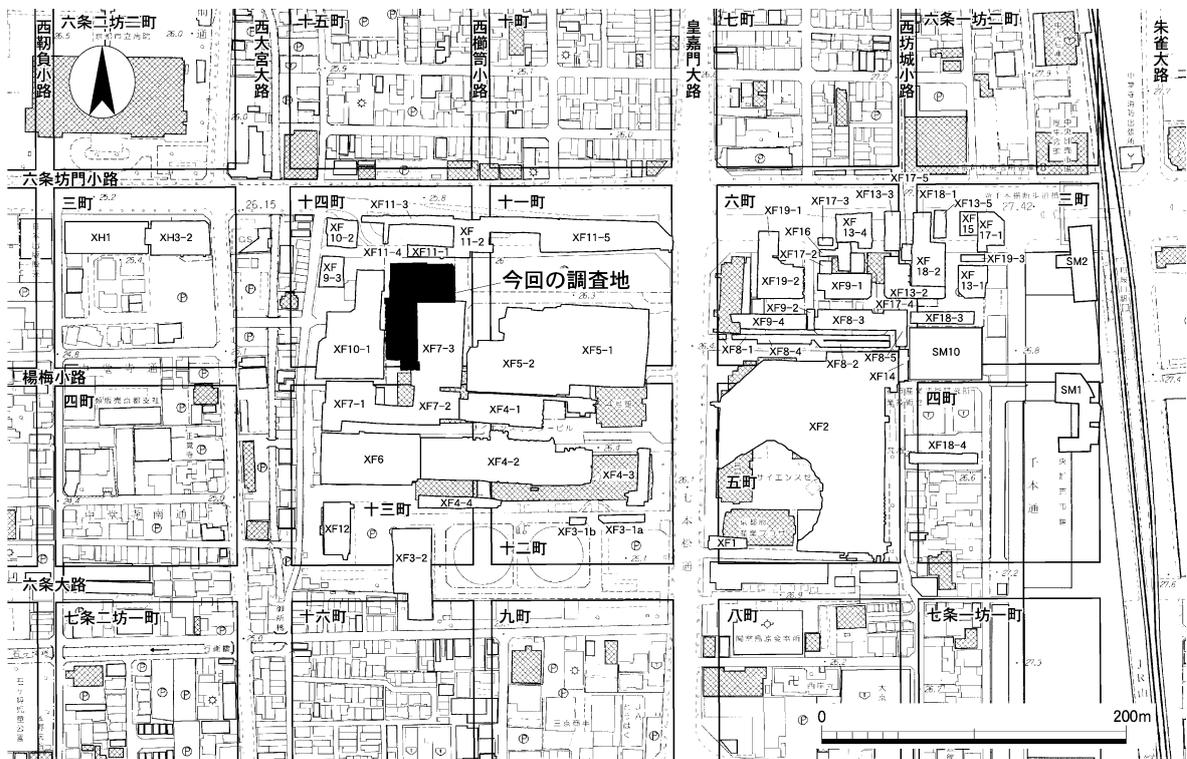


図1 調査位置図 (1:5,000)

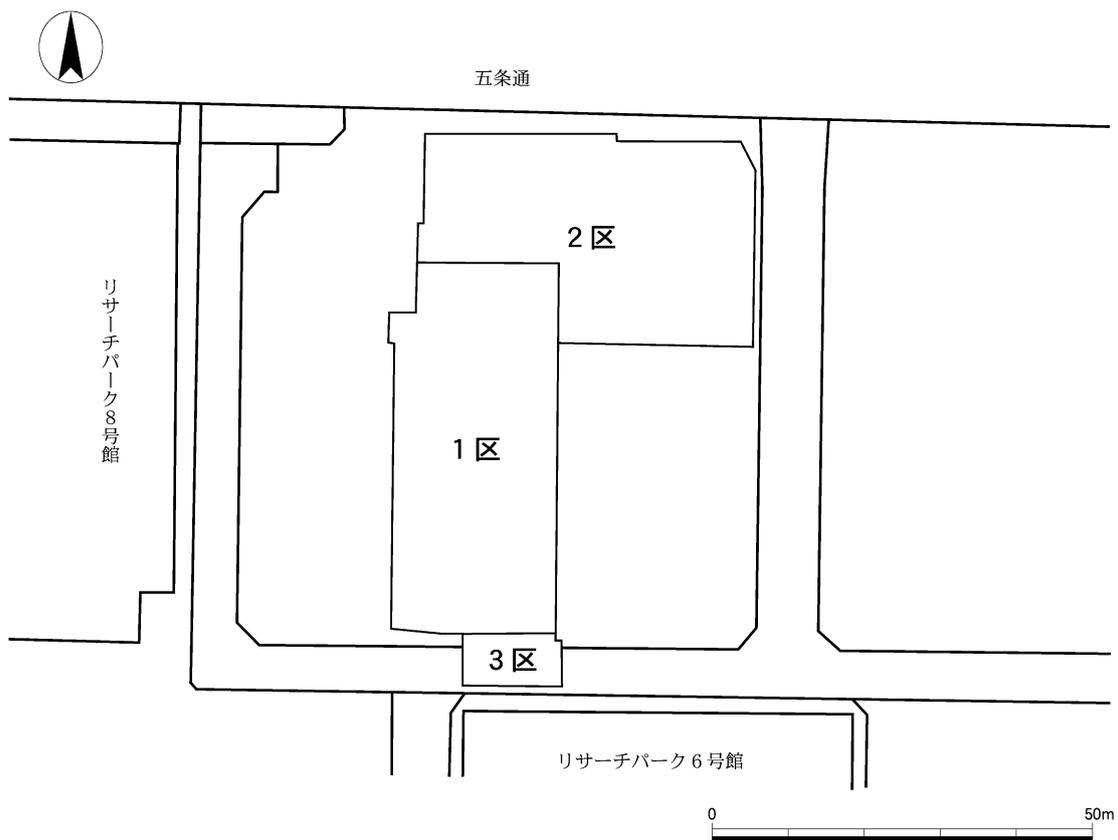


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

査がほぼ終了した段階で1区の南側、リサーチパーク構内の車路となっている部分にも小調査区を設定し、3区として調査を行った。調査は、重機により盛土を掘削、以降、人力により遺構の検出に努め、実測・写真撮影などの記録保存を行った。

調査は、平成20年10月3日より開始し平成21年3月19日に終了した。なお、調査中の平成21年2月14日に調査成果を市民に公開するため、現地説明会を行い、約180名の参加を得た。



図3 調査前全景 (北東から)

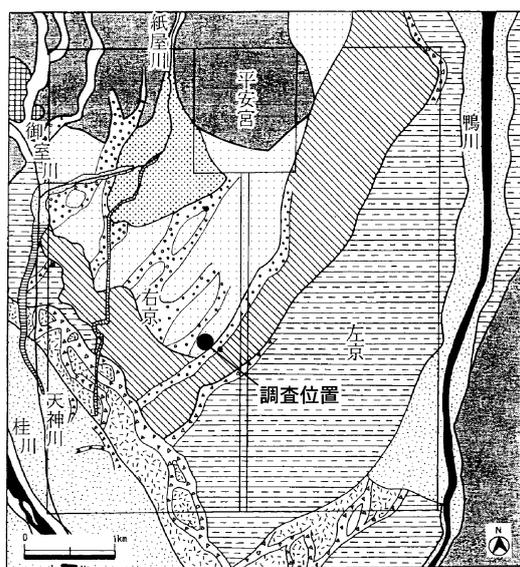


図4 作業風景

2. 位置と環境

調査地は、五条通の南、JR 丹波口駅から西へ約 450 m の場所にあり、平安京条坊呼称では右京六条一坊十四町にあたる。平安京は、東西を鴨川・桂川の両河川、北は北山、南は巨椋池に囲まれた京都盆地北部に位置する。この範囲の地形は、いくつかの扇状地が複合して形成されている¹⁾。一般に左京に比べ低湿といわれる右京域であるが、実際には、いくつかの段丘面と複数の埋没河川によって形成されている²⁾。調査地は、このうち鴨川扇状地帯の段丘面の先端部に位置しており、現況地形でもここから西側は 1 m 以上低く、東側はほぼ平坦な地形が続く。調査地は、このように人間生活を営むのに比較的適した立地といえる。

調査地を含む右京六条一坊は、建物建設、区画整理などに伴って、多くの調査が実施されてきた地域である。平安時代以前の遺構は、後世の削平によりほとんど残されていないが、遺物は、縄文時代から古墳時代のもものが流路などから出土している。出土地点としては、今回調査地から特に東側に集中してみられる。時期的には縄文時代晩期、弥生時代前期から後期、古墳時代前期から後期まで連続して出土している。平安時代の遺構は右京全体の傾向と同じく、9 世紀代の遺構が集中している。特に 9 世紀後半の遺構は、4 分の 1 町規模から 1 町規模の宅地が、朱雀大路から西大宮大路まで連続して確認されている。10 世紀代の遺構・遺物の検出例はこれまでほとんどないので、土地利用の実態は不明である。しかし、12～13 世紀では、朱雀大路から皇嘉門大路の間で、建物・御堂・庭園・道路側溝などが検出されており、都市的な空間が形成されている。しかし、室町時代以降は、耕作地としての利用が続き、明治時代を迎える。明治 40 年には、島原競馬場が建設され、馬場をめぐる濠が、今回の調査で確認されている³⁾。島原競馬場は大正元年の火災により炎上、焼失。京都府船井郡須知町（現京丹波町）に移転し、この跡地を京都瓦斯株式会社（後、大阪瓦斯会社と合併）が買収し現在に至る。



凡例

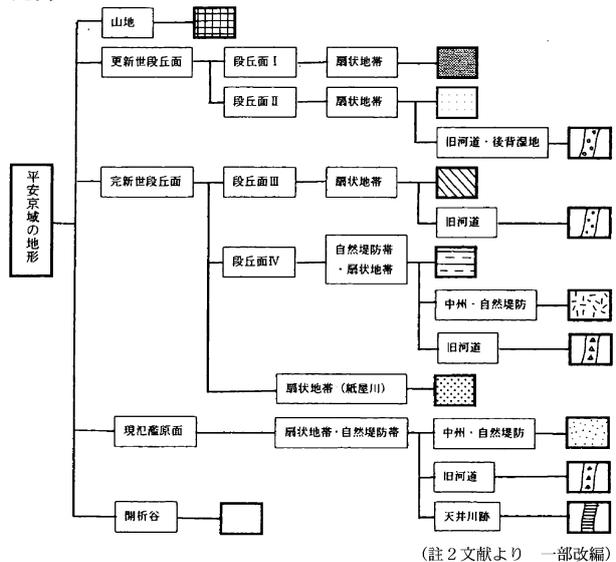


図 5 平安京地形分類図

註

- 1) 石田志朗「京都盆地北部の扇状地－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』34巻12号 1984年
- 2) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年
- 3) 『京都競馬場80年史』日本中央競馬会 京都競馬場 2005年

参考文献（周辺の調査成果については以下の報告書を参考にした。）

- 1 『平安京右京六条一坊－平安時代前期邸宅跡の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 2 「平安京右京六条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 3 「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4 「平安京右京六条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 6 「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 「平安京右京六条一坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 8 「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 9 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 10 「平安京右京六条一坊一・二町跡」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 11 『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 12 『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 13 『平安京右京六条二坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-2（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 14 『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の基本層序は、ほとんどの範囲において、遺構面直上までがガス工場時代の盛土であり、この直下が、平安時代遺構面となる基盤層の黄褐色砂泥となる。この砂泥層は、調査区東端では厚さ約1m堆積し、安定した地盤を形成しているが、競馬場濠より西側にはほとんど堆積せず、基盤層は砂礫層となる。

調査地は南北約70mを測り、現地表面の標高は、調査区北端で26.3m、南端で26.2m、遺構面の標高は、北端で24.9m、南端で24.7mとほぼ水平である。これは、先述したように基本的には現代の削平の結果であるが、平安時代の柱穴の遺存深度をみると、北と南でそれほど差がないことから、旧地形もこれに近かったものと考えられる。東西方向の遺構面の傾斜をみると、2区の東端から競馬場の濠東肩までが標高24.9m、西端が24.6mであった。調査区東端から競馬場の濠東肩まではほぼ水平であるが、濠より西側で若干低くなっている。

(2) 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代から室町時代のものがあるが、時代別に見たとき、平安時代の遺構が最も多く、この時期のものが9割以上を占め、ついで室町時代となる。

平安時代の遺構には、9世紀代のものと11世紀代のものがある。9世紀代の遺構には、掘立柱建物・塀・門状遺構・溝・流路などがある。室町時代の遺構では、耕作に伴うと思われる素掘り溝の他、土坑がある。土坑の中には、土取り穴と思われるものと墓の可能性のあるものがある。これらの遺構からは、15世紀代の土師器などが出土するが量は極めて少なく、当時の土地利用のあり方を反映するものと思われる。

以下、時代順に遺構種類ごとに述べる。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	溝204	灌漑用水路に伴う溝。
平安時代前期～中期	建物1～6、門1～3、柵1・2、 溝36・37・95・194	建物はすべて掘立柱建物。 門は宅地内に存在する。
平安時代後期	落込み190、溝191	
室町時代	土坑12・16・17・87・94・170、 溝132・137・192・193	溝はいずれも耕作に伴うもの。

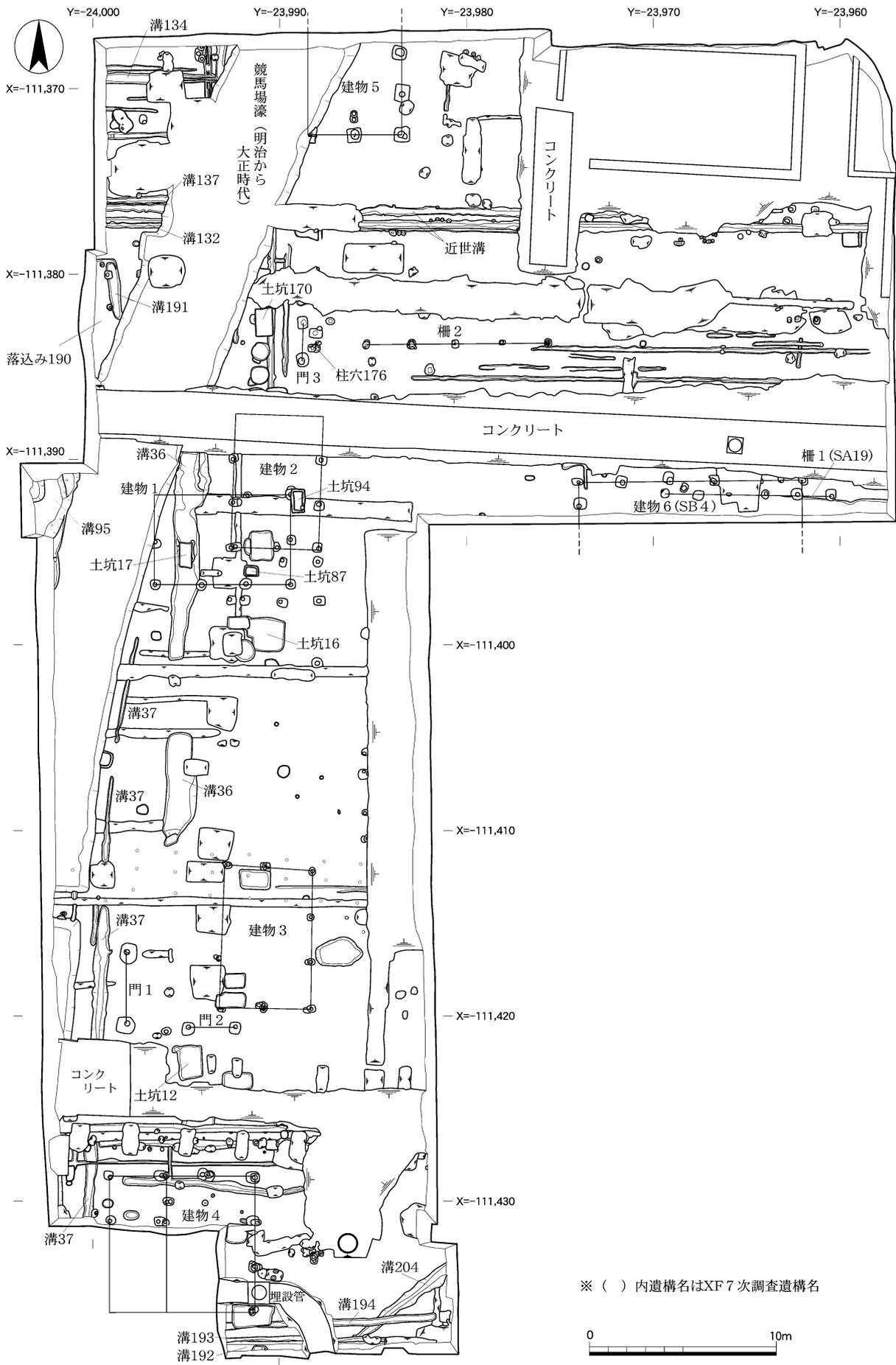


図6 遺構平面図 (1 : 300)

(3) 弥生時代の遺構

溝 204 調査区南端で検出した北東から南西方向の溝。幅 0.4 ～ 0.9 m、深さ約 0.1 mを測る。遺物の出土はないが、XF 7次調査の、弥生時代後期の溝である SD180 と繋がることを確認している。同時期の可能性が高い。SD180 は杭による堰を伴っており、溝 204 はこの堰の下流側となる南側において繋がっており、用水路としての機能をもつものと考えられる。

(4) 平安時代の遺構

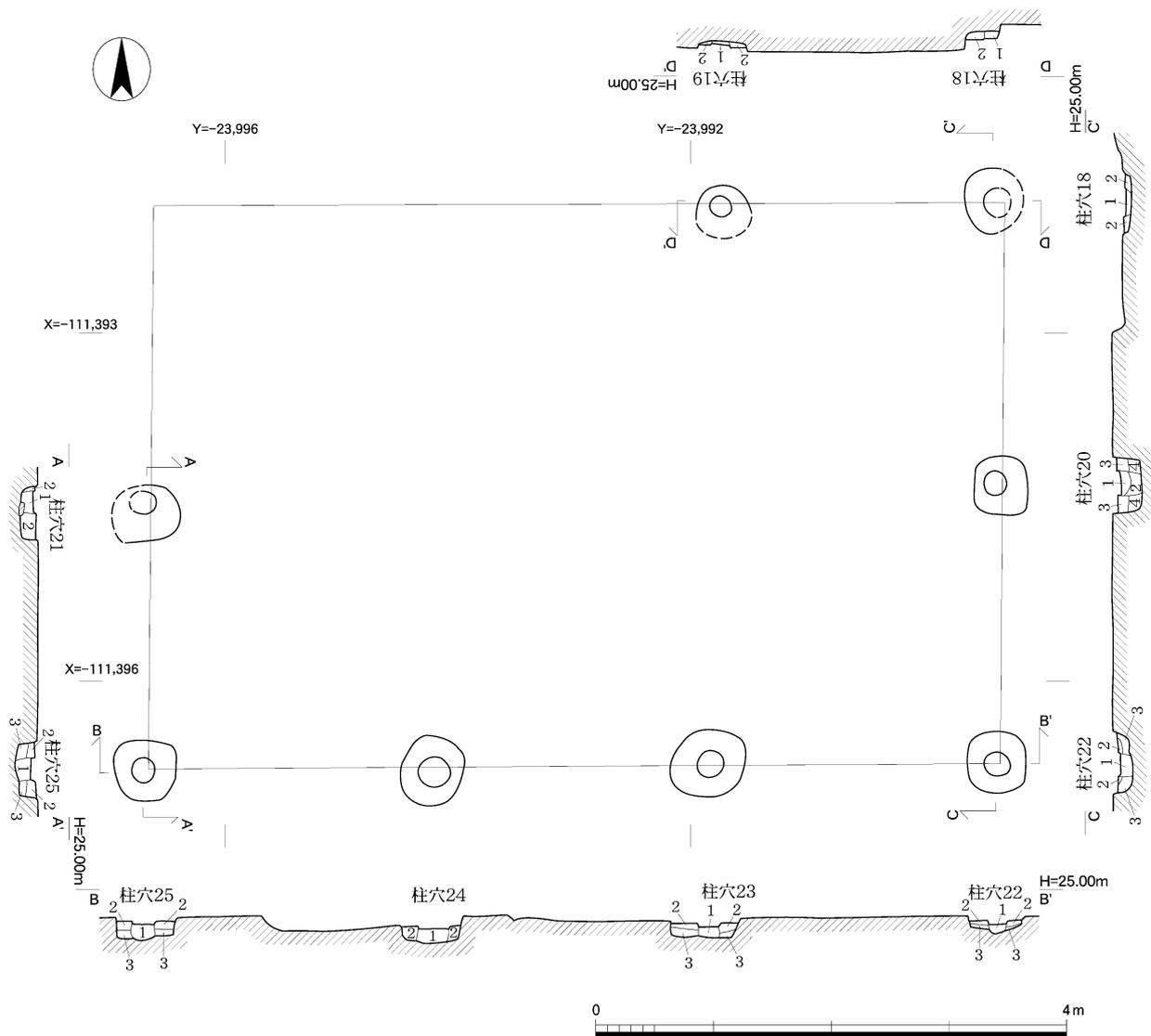
1) 掘立柱建物

掘立柱建物は、調査区の西寄りに南北に並ぶように 5 棟検出している。調査区の北東部にも柱穴をいくつか検出しているが、周辺の建物基礎による攪乱が大きく、建物を復元するには至らなかった。検出した掘立柱建物は、いずれも建物規模としてはそれほど大きくはない。ただし、建物 5 は柱掘形・柱痕跡ともにそれ以外のものよりも一回り規模が大きく、柱間も広い点が注目される。

建物 1 (図 7、図版 3) 調査区のほぼ中央で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の東西棟建物。柱間は、梁間・桁行ともに 2.4 m (8 尺) の等間である。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mを測る。柱痕跡は径 0.2 mを測る。建物方位はほぼ座標方位である。南側柱列と溝 36 の重なりから、溝 36 埋没後に建物が建てられたことがわかる。

建物 2 (図 8、図版 3) 建物 1 と重なり合う位置で検出した梁間 2 間、桁行 2 間以上の南北棟建物。柱間は、梁間が 2.25 m (7.5 尺)、桁行が 2.4 m (8 尺) を測る。建物北半の柱穴は、現代の建物基礎によって失われているが、その北側で柱穴を検出できなかったことから、建物規模は桁行 3 間と復元できる。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.25 mを測る。柱痕跡は径 0.2 mを測る。建物方位は北に対してわずかに東に振れる。西側柱列は建替えによる柱穴の掘り直しだが、当初のもの西側に確認される。これらの柱掘形は、径 0.4 mと当初のものよりも一回り小さい。

建物 3 (図 9・10、図版 4・8) 調査区南半で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の南北棟建物。柱間は、梁間が 2.25 m (7.5 尺)、桁行が 2.4 m (8 尺) を測る。複数の柱穴に、根石を伴う柱の据え直しが確認されている。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.25 mを測る。柱痕跡は径 0.15 ～ 0.2 mを測る。建物方位は、北に対してわずかに東に振れる。柱穴の掘形内には、石を詰めたものが多く、その大きさから径約 20 cmの礎石状の石と径約 10 cmの礫群に分かれる。柱穴 51 ～ 53・93 では、石を掘形底面に置いており、この上に柱を置いたことが断面観察によってわかる。また、柱穴 53 では、2 回に分けて根石が詰められた状況が確認された。当初の石は掘形底部に径約 10 cmの石を数石置いている。2 回目は当初の石の上にさらに径約 20 cmの石を置き、この石の上面に、径約 10 cmの礫群を径 20 cmの円を描くように置いており、柱の根巻と思われる。柱穴 56・64・75 では掘形内で礫群を検出している。この礫群の検出状況には二通りある。



柱穴21

- 1 5Y4/2灰褐色砂泥
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥

柱穴25

- 1 7.5YR4/2灰褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質

柱穴24

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥

柱穴23

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥、7.5Y3/4暗褐色砂泥ブロック含む
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥
- 3 10YR4/6褐色砂泥

柱穴22

- 1 7.5YR4/1褐灰色砂泥 やや粘質
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥
- 3 7.5YR4/6褐色砂泥

柱穴20

- 1 10YR4/4褐色砂泥
- 2 7.5YR4/3褐色砂泥
- 3 7.5YR4/4褐色砂泥
- 4 7.5YR4/6褐色砂泥

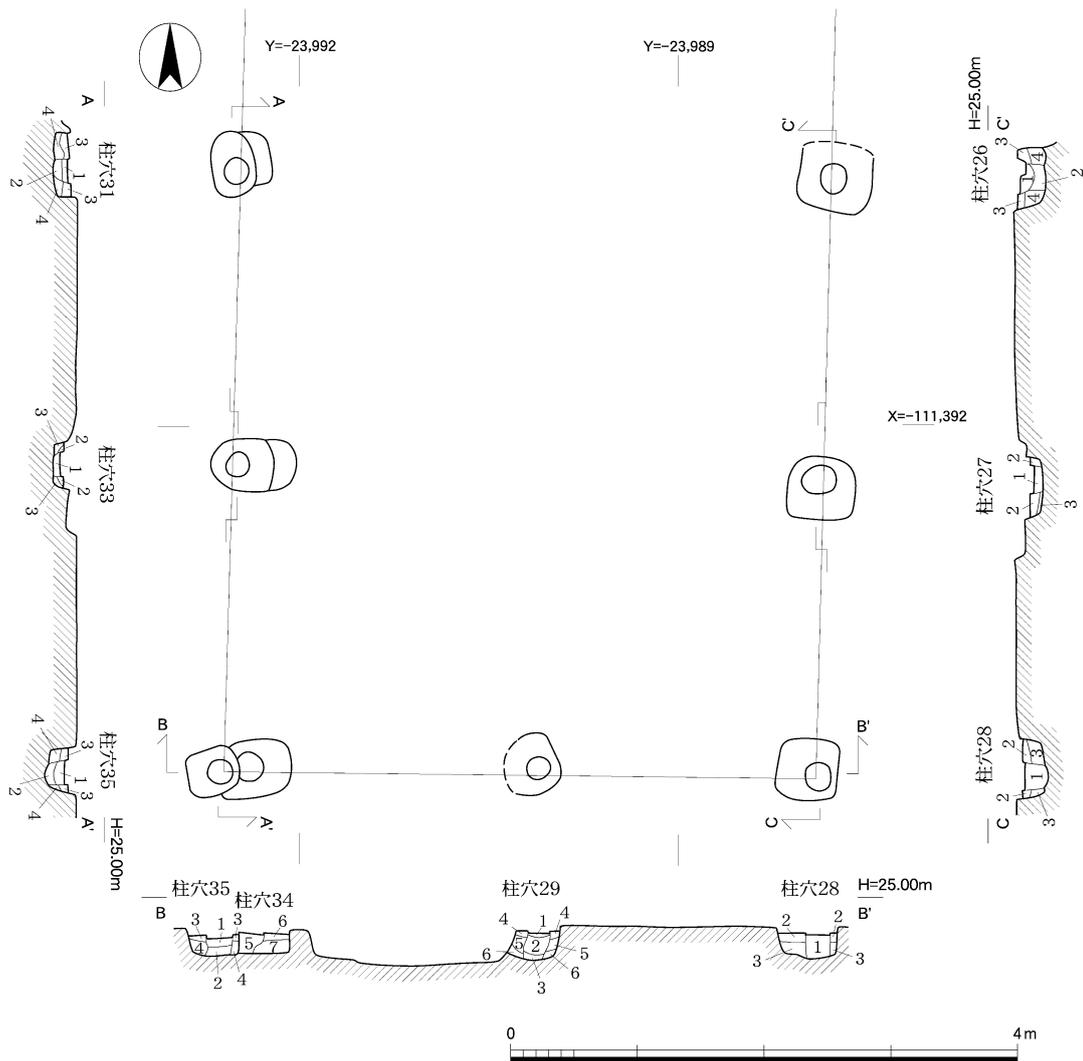
柱穴18

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 やや粘質
- 2 10YR4/4褐色砂泥 やや粘質

柱穴19

- 1 10YR3/4暗褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥

図7 建物1実測図 (1 : 60)



柱穴31

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 7.5YR4/3褐色粘質土
- 3 7.5YR4/2灰褐色砂泥
- 4 7.5YR4/4褐色砂泥

柱穴33

- 1 7.5YR4/1褐灰色粘質土
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 やや粘質
- 3 10YR4/4褐色砂泥
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥

柱穴35

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質
- 3 7.5YR4/3褐色砂泥
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

柱穴34

- 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥 やや粘質
- 6 10YR3/3暗褐色砂泥
- 7 10YR4/4褐色砂泥

柱穴29

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥
- 3 10YR4/4褐色砂泥
- 4 7.5YR3/3暗褐色砂泥
- 5 10YR2/3黒褐色砂泥 やや粘質
- 6 7.5YR4/3褐色砂泥 やや粘質

柱穴28

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 やや粘質
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥 やや粘質
- 3 7.5YR4/4褐色砂泥 やや粘質

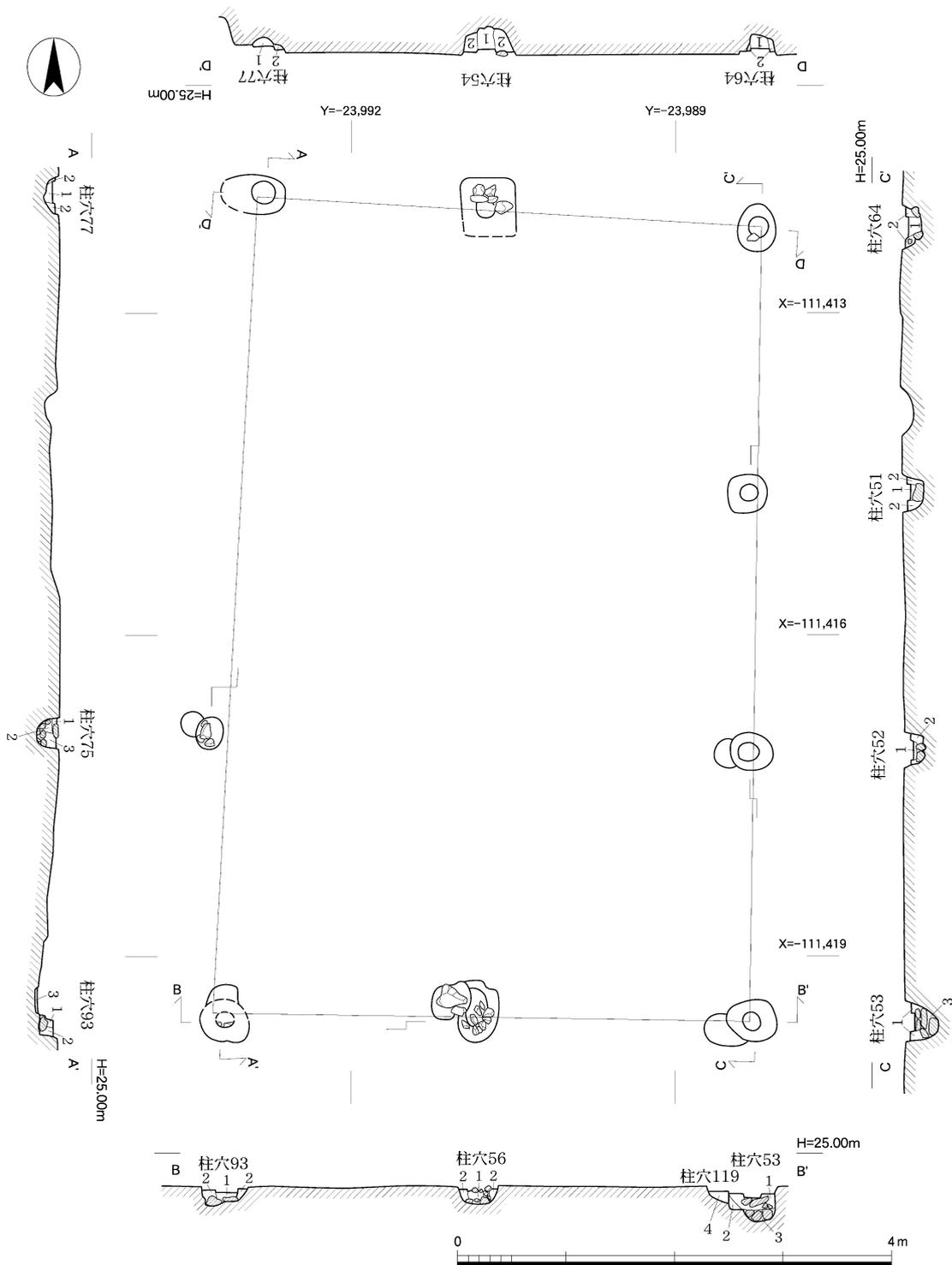
柱穴27

- 1 7.5YR4/1褐灰色粘質土
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 3 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥 やや粘質

柱穴26

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥粘質土
- 3 7.5YR4/3褐色砂泥
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 やや粘質

図8 建物2実測図 (1:60)



柱穴77

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

柱穴75

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥 1cm大の石含む(根石)
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
- 3 7.5Y3/4暗褐色砂泥 1cm大の石含む

柱穴93

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 やや粘質
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥

柱穴56

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

柱穴53

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥

柱穴119

- 4 10YR4/6褐色砂泥

柱穴52

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

柱穴51

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

柱穴64

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

柱穴54

- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 2 7.5YR4/3褐色砂泥

図9 建物3実測図 (1:60)

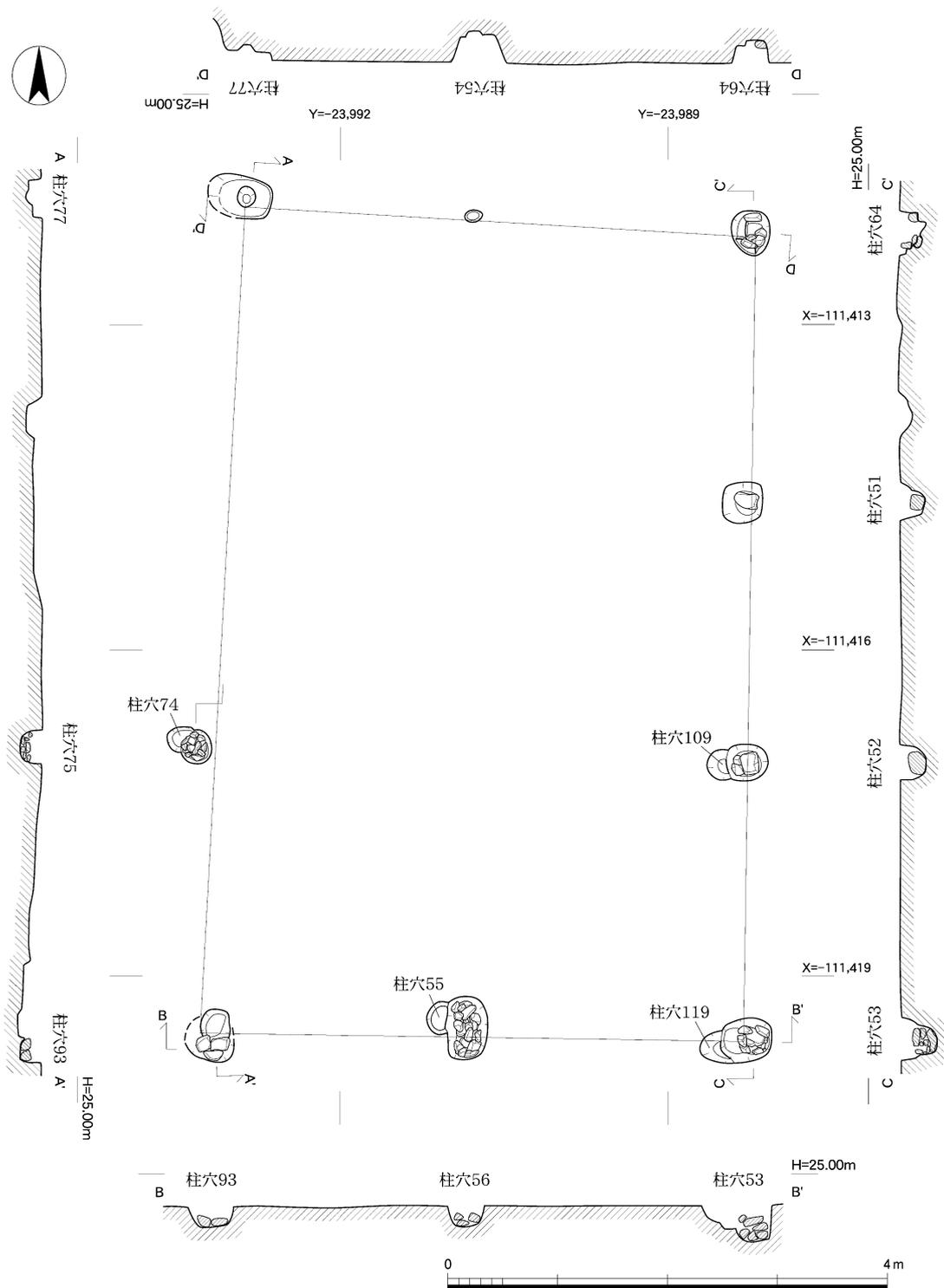


图 10 建物 3 根石検出状況実測図 (1 : 60)

柱穴 64 では、掘形底面に残された柱痕跡の凹みの周りを取り巻くように礫群を検出しており、柱の根巻として置かれたものと考えられる。一方、柱穴 56・75 では、掘形底面に敷かれた状態で礫を検出しており、この上に柱が置かれたと考えられるが、一部の礫は根巻であった可能性もある。また、柱穴 52・53・56・75 では、この掘形底面に置かれた石・礫の上層でも石・礫を検出しており、柱の腐食に伴う修復が加えられたことがわかる。また、これらと重なりが認められる柱穴 55・74・109・119 は、石・礫を全く伴わないことから柱の据え直しのためのものではなく、建物の老朽化に伴う添え柱の可能性も考えられる。建物方位、建物規模・柱間が建物 2 と全く同じであることから、建物 2 と建物 3 は同時並存したと考えられる。また、建物 2 と建物 3 の両者の柱穴構造の違いは、建物構造の違いによるものではなく、南北にわずか 15 m という距離ではあるが当時の地下水位の違いによるものと考えられる。

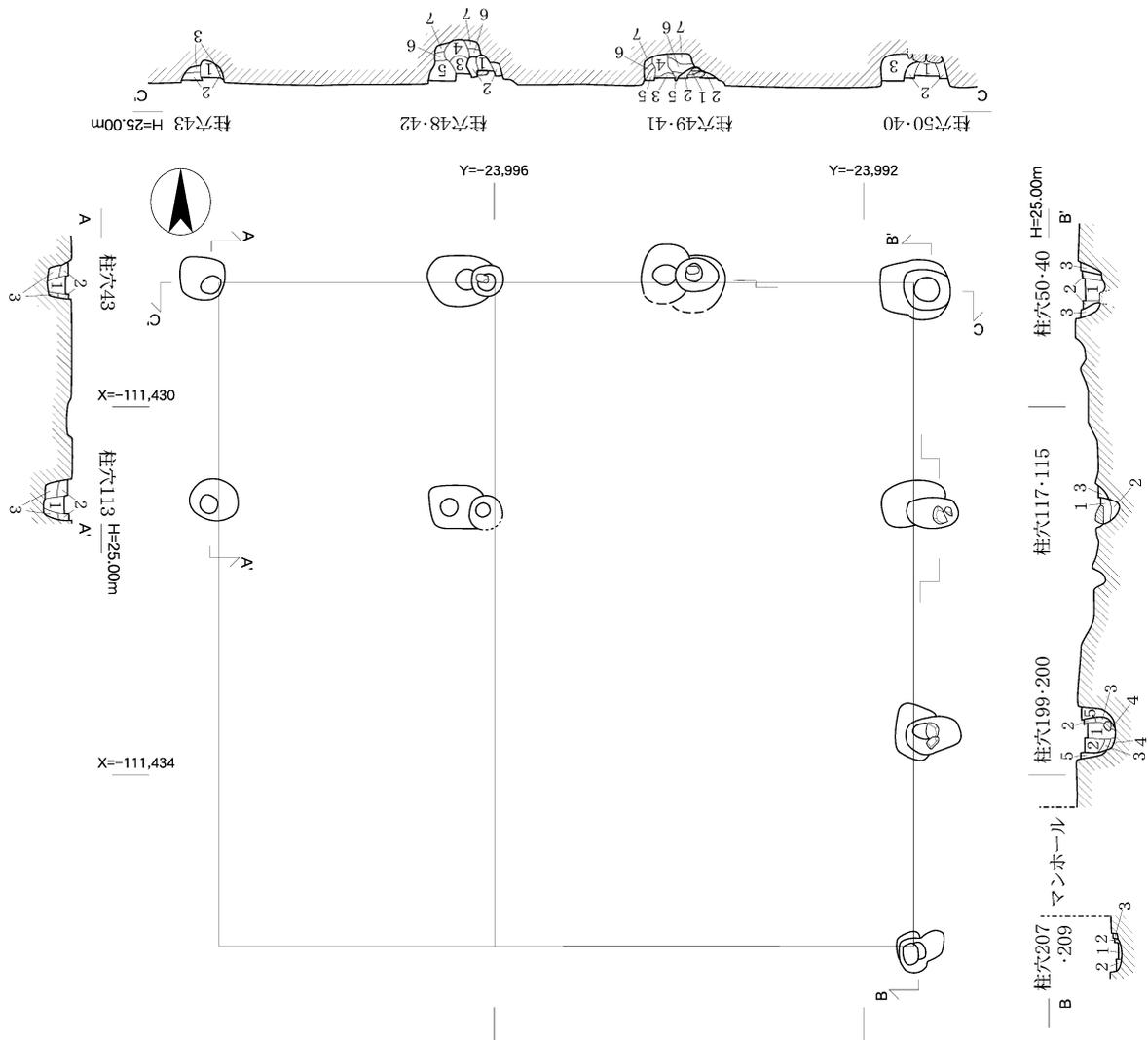
建物 4 (図 11、図版 5・8) 調査区南端で検出した身舎の梁間 2 間、桁行 3 間で西に庇の付く南北棟建物。柱間は、梁間が 2.4 m (8 尺)、桁行が 2.4 m (8 尺)、庇の出が 2.7 m (9 尺) を測る。柱掘形は、身舎部分は全ての柱穴の掘り直しが行われており、当初のものは判然とはしないが、平面形は楕円形を呈すると思われ、径 0.4 m × 0.7 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m を測る。柱痕跡は径約 0.2 m を測る。建物方位は、ほぼ座標方位である。身舎の柱穴の掘り直しは 2 ~ 3 回行われている。この掘り直された柱掘形は、0.45 m × 0.3 m で平面形は楕円形を呈し、深さ 0.25 ~ 0.4 m、柱痕跡は計 0.2 m を測る。柱穴 50 の掘形底部には径 0.15 m の石を置いている。庇の柱掘形の平面形は、方形あるいは円形を呈し、径 0.5 m、深さ 0.25 m、柱痕跡は 0.15 ~ 0.18 m を測る。

建物 5 (図 12、図版 5・8) 調査区北端で検出した梁間 2 間、桁行 2 間以上の南北棟建物。柱間は梁間が 2.55 m (8.5 尺)、桁行が 2.25 m (7.5 尺) を測り、柱掘形の平面形方形を呈し、一辺 0.6 ~ 0.9 m、深さ 0.25 ~ 0.4 m を測る。柱痕跡は径 0.4 m を測る。各柱痕跡の芯にあたる部分には腐食した柱材が遺存しており、樹種同定の結果、すべてヒノキ材であった。建物方位は座標方位である。建物の北側および西側が攪乱などにより失われており、建物規模は明らかではないが、明治時代の競馬場濠の西側で、関連する柱穴を検出できないことから南北棟建物であることがわかる。柱間・掘形・柱痕跡ともに、今回検出した建物の中で規模が最も大きい。

建物 6 (図 13、図版 7) 調査区北東部で検出した東西棟建物。XF 7 次調査で検出した東西棟 SB 4 の身舎の北側柱列を検出した。柱穴は東西に 12 m、5 間分を検出する。柱間は 2.4 m を測る。柱掘形の平面形は、方形あるいは長方形を呈し、一辺 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m を測る。柱痕跡は径 0.3 m を測る。後世の削平によりほとんどの柱穴が、掘形の最底部しか遺存していないが、いずれの柱穴も本来は一辺 0.6 m の方形であったと考えられる。今回の調査によって、XF 7 次調査の SB 4 は、梁間 2 間、桁行 5 間の身舎に南庇の付く東西棟であることが明らかとなり、身舎桁行柱間は 2.4 m (8 尺)、梁行柱間は 2.1 m (7 尺)、庇の出は 2.7 m (9 尺) となる。

2) 門

柱穴 2 基からなる門状の遺構。調査区の北部と南部で計 3 基を検出する。検出位置はいずれも十四町内にあることから、宅地の出入り口の施設ではないことがわかるが、性格については明ら



柱穴43

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 粘質、7.5YR4/3褐色砂泥
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR3/4暗褐色砂泥

柱穴113

- 1 10YR4/1褐灰色粘質土
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
- 3 10YR3/4暗褐色砂泥

柱穴207

- 1 10YR4/1褐灰色粘土
- 2 10YR6/6明黄褐色砂泥

柱穴209

- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

柱穴199

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 炭混じり
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR4/6褐色砂泥
- 4 10YR4/4褐色砂泥

柱穴200

- 5 10YR3/4暗褐色砂泥

柱穴117

- 1 10YR3/3暗褐色粘質土
- 2 10YR3/4暗褐色粘質土

柱穴115

- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土

柱穴50

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 やや粘質
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

柱穴40

- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥

柱穴49

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 粘質
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

柱穴41

- 3 10YR4/1褐灰色砂泥 粘質
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 粘質
- 5 10YR5/1褐灰色砂泥
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

柱穴48

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 粘質
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

柱穴42

- 3 10YR4/4褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、10YR5/1褐灰色粘土
- 5 10YR5/1褐灰色砂泥
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥



図 11 建物 4 実測図 (1 : 60)

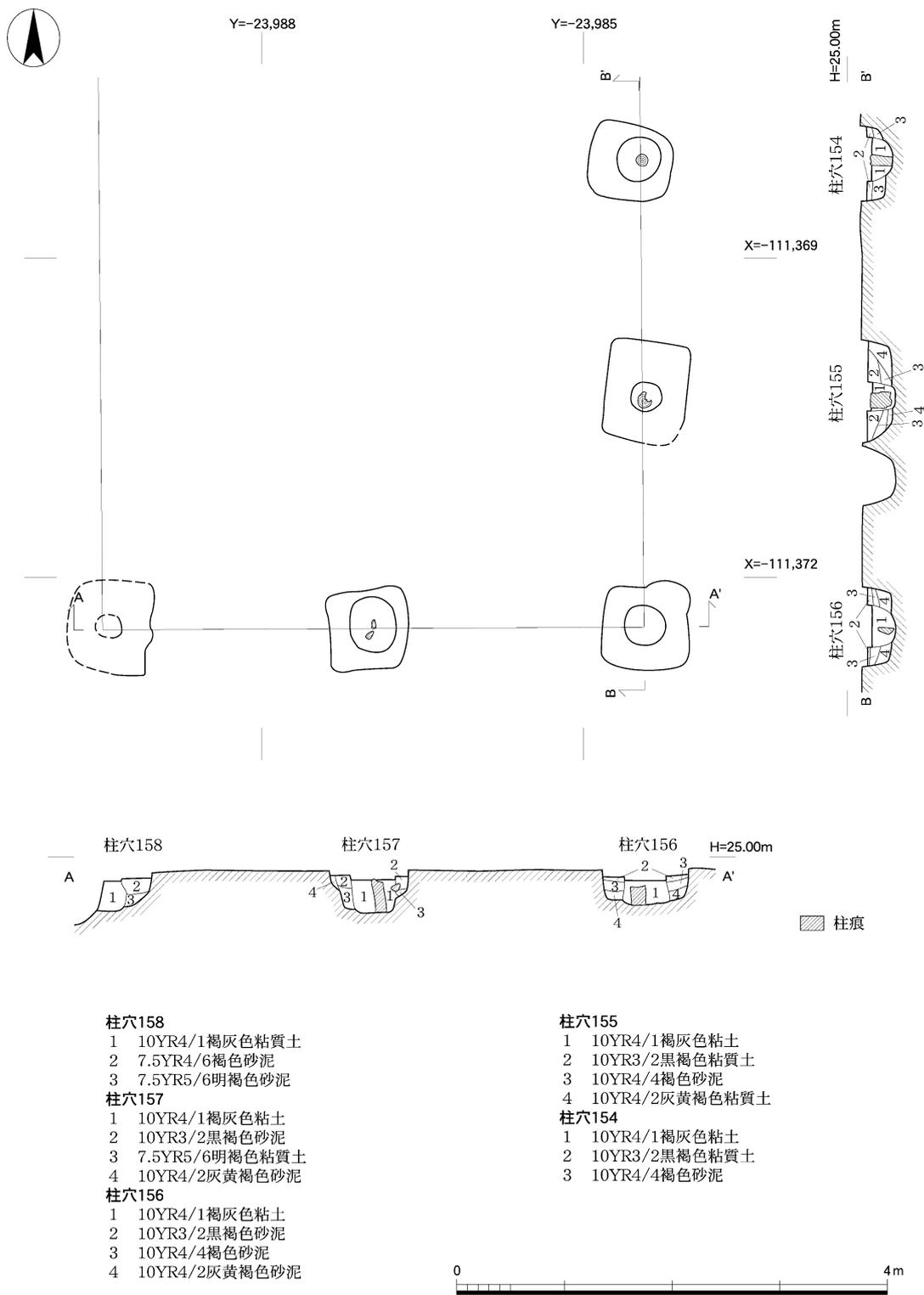
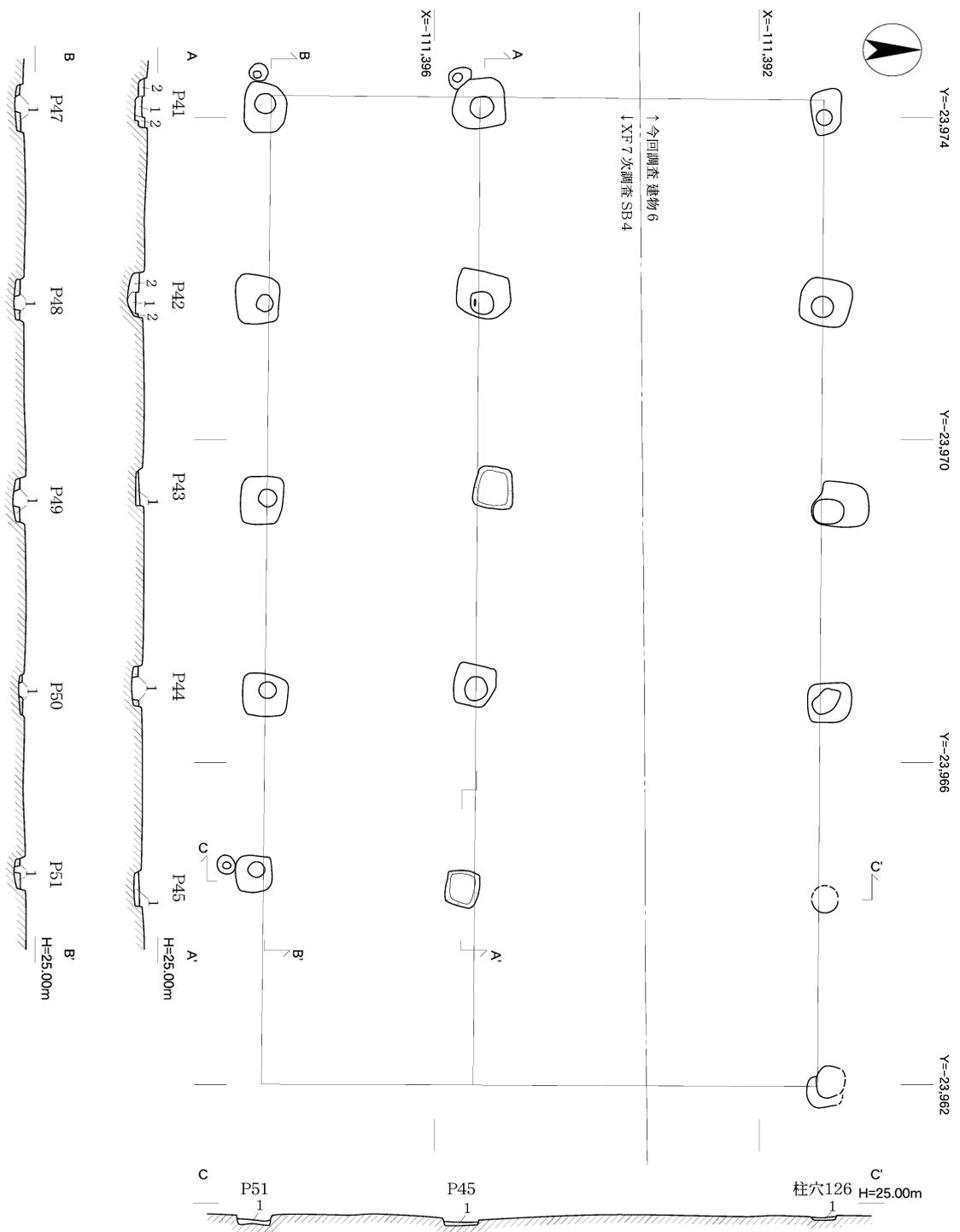


图 12 建物 5 実測図 (1 : 60)



- P47
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- P48
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- P49
1 10YR4/4 褐色砂泥
- P50
1 10YR4/4 褐色砂泥
- P51
1 10YR4/4 褐色砂泥

- P41
1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- P42
1 7.5YR4/3 褐色砂泥
2 10YR4/4 褐色砂泥
- P43
1 10YR4/4 褐色砂泥

- P44
1 10YR4/4 褐色砂泥
- P45
1 10YR4/4 褐色砂泥
- 柱穴126
1 10YR4/4 褐色砂泥



図13 建物6 実測図 (1 : 60)

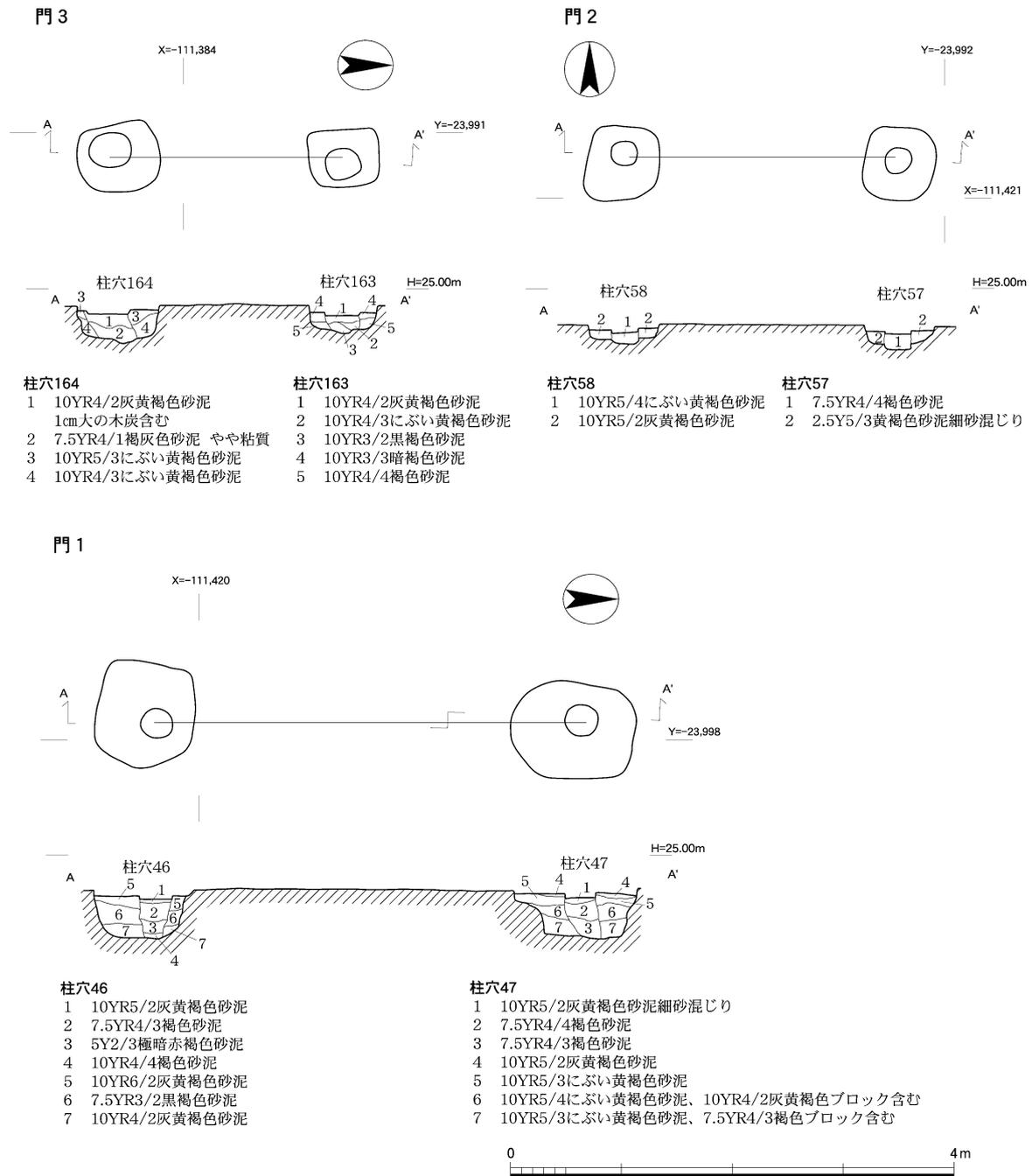


図 14 門 1～3 実測図 (1:60)

かではない。柱穴の掘形規模や柱間など、3基ともに異なる。

門 1 (図 14、図版 4・6) 調査区の南西部で南北方向に検出。柱間は 3.9 m (13 尺) を測る。柱掘形の規模・平面形は北側の柱穴 47 と南側の柱穴 46 で異なる。柱穴 47 の柱掘形の平面形は、楕円形に近い方形を呈し、径 0.9 m × 1.1 m、深さ 0.4 m を測る。掘形の南壁は 2 段掘りになっている。これは、南側から比較的長い柱を落とし込む為のものと思われる。柱穴 46 は、0.9 m × 1.0 m で、平面形は方形を呈し、深さは 0.4 m を測る。柱痕は、検出面では径 0.3 m あるが、掘形底部ではいずれも径 0.2 m、これは柱を抜き取った結果であることが断面観察によりわかり、柱径は掘形規模のわりには細い。柱が掘形規模と比較して細いこと、柱穴 47 には柱を落とし込む為

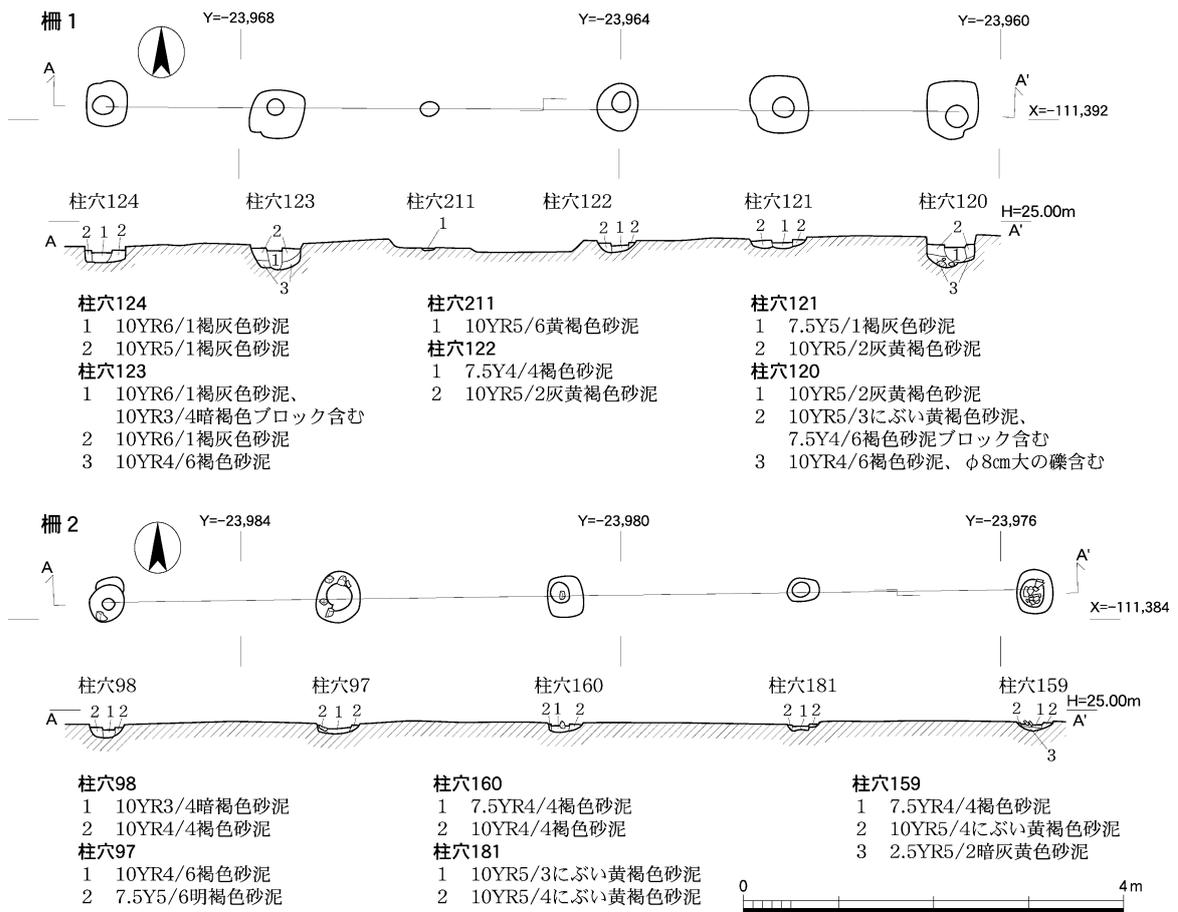


図 15 柵 1・2 実測図 (1 : 80)

の段を設けていることなどから、柱は細長いものであったと考えられる。柱掘形からは、小片ではあるが9世紀後半の土師器が出土している。また、XF 7次調査では、門1から東へ22.2 mと36.6 mの地点で、一直線に並ぶ位置関係で同様の遺構を2基 (SX10・11) 検出しており一連の遺構と考えられる。

門2 (図14、図版4・6) 門1の南東側で東西方向に検出。柱間は2.4 m (8尺) を測る。柱掘形は平面形は方形を呈し、径0.6 ~ 0.7 m、深さ約0.15 mを測る。柱痕は径0.2 mを測る。

門3 (図14、図版7) 調査区北部で南北方向に検出。柱間は2.1 m (7尺) を測る。柱掘形は平面形は方形を呈し、一辺0.5 ~ 0.7 m、深さ0.15 ~ 0.2 mを測る。柱痕は、検出面では径0.3 mを測るが、断面観察では2基の柱穴ともに南方向に柱が抜き取られていることがわかり、本来はこれよりも細かったことがわかる。柱穴164の掘形底面では径約0.2 mの凹みが検出されており、これが柱径であった可能性がある。

3) 柵

柵は、調査区北部および北東部で計2条を検出した。いずれも掘立柱で東西方向である。

柵1 (図15、図版7) 調査区北東部で検出した東西方向の柵。この遺構の検出範囲は、XF 7次の調査区と重なっており、XF 7次調査のSA19と同じ遺構である。今回の調査により規模が確定した。東西5間、9.0 m、柱間は1.8 mを測る。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.4 ~ 0.6

m、深さは 0.15 ～ 0.35 mを測る。

柵 2 (図 15、図版 7) 調査区北部で東西に 9.6 m、4間を検出する。柱間は 2.4 mを測る。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺 0.3 ～ 0.6 m、深さは 0.1 mを測る。柱痕跡は径 0.18 ～ 0.25 mを測る。東端の柱穴 159 には柱痕の上に 10 cm程度の平瓦片を数点敷いている。柱腐食による間詰に伴う礎石の代用と思われる。

4) 溝

溝 36 (図 16、図版 9) 調査区の中央部から南部で検出した南北方向の溝。幅 0.8 ～ 1.6 m、深さ 0.15 ～ 0.3 mを測る。途中で約 4 m途切れ、北半部と南半部に分かれるが、一直線上にあること、埋土が同じであることなどから同一の溝と考えられる。南半部の溝底は平坦であるが、北半部は南から北へ溝底が傾斜しており、排水を北へ行っていたことがわかる。溝の埋土は 1 層で人為的に埋められており、流水や滞水を示すような堆積土はない。建物 1 の柱穴との重なり関係から、建物 1 に先行する遺構であることがわかる。

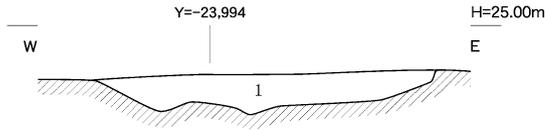
溝 37 (図 16、図版 9) 調査区の南西部で検出した南北方向の溝。幅約 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測る。溝底は北から南へと傾斜しており、排水を南へ行っていたことがわかる。溝の埋土は 1 層で人為的に埋められており、流水や滞水を示すような堆積土はない。建物 1・溝 36 と平行する位置関係にあり、出土遺物にも時期差はないが、埋土が異なっており、これらの遺構と同時併存したものではないと考えられる。後述する 11 世紀代の遺物の出土する落込み 190 の埋土に近い。

溝 95 (図 16・25、図版 9) 調査区の南北中央の西端で検出した南北方向の溝。XF10 次調査で検出した平安時代以前の流路 SD34 がほぼ埋没した段階で、その東端に掘削された溝である。自然流路の一部である可能性もあるが、XF10 次調査の成果と合わせて断面形をみると、逆台形を呈しており、人工的な溝の可能性が高い。XF10 次調査では、流路は北から南へ流れてきたものが、緩やかに曲がり南西方向に流れを変えるが、今回検出したのはこの屈曲部にあたる。今回の検出幅は約 2.4 mであるが、XF10 次調査の流路 1 と合わせるとこの部分の溝幅は約 4 mとなる。また、検出深度は約 1 mである。溝 95 の東肩は明治時代の競馬場の濠により削平されており、成立面の高さは不明である。

溝の埋土は 13 ～ 21 層であり、12 層より上層は溝埋没後に堆積したものである。溝とは直接関係しないが、平安時代以降の堆積上を知る事のできる只一の地点である事から、12 層より上層の様相も併せて述べる。6 ～ 8 層は粒子の細かい砂泥からなり、滞水域で堆積した可能性がある。遺物の出土がない。9 層は著しく擾乱されている泥土、花粉分析ではキュウリ属が産出している。この東端の 10 ～ 12 層は畦畔状の高まり状を成す。14 層には、15 層がブロックで含まれており、人為的な攪拌が存在したことがわかる。9 世紀代の遺物がややまとまって出土する。17 ～ 19 層は 1 ～ 2 cmの礫を含む砂礫層、溝 95 の純粋な堆積層はこの部分のみと思われる。20・21 層にはラミナがなく、早い段階で肩部の土が崩落したものの可能性がある。

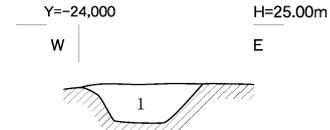
なお、自然科学分析によると、16 層から出土した植物遺体の若年枝の暦年較正年代は

溝36 (X=-111,392ライン)



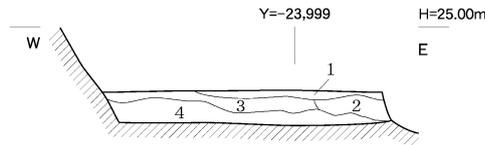
1 10YR4/2灰黄褐色砂泥

溝37 (X=-111,416ライン)



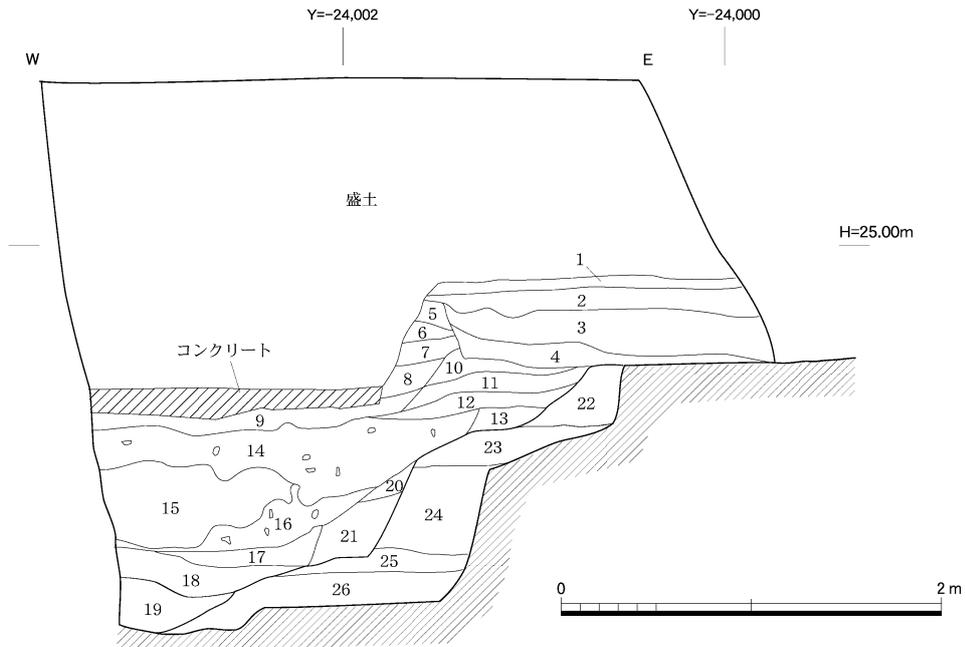
1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

落込み190・溝191 (X=-111,383ライン)



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (整地層210)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土 (溝191)
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、やや粘質 (落込み190)
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥

溝95 (1区北西隅壁面)



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥炭混り (大正以降耕土)
- 2 2.5YR4/3 オリーブ褐色砂泥細砂混り、φ1cm大の礫含む (大正以降耕土)
- 3 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色砂礫 (明治競馬場濠)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥細砂混り (明治競馬場濠)
- 5 7.5YR5/2 灰褐色砂泥細砂混り
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、固く縮まる
- 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1cm大の礫含む
- 9 2.5YR4/2 暗灰黄色泥土、縮まりなし
- 10 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm大の礫含む
- 11 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ2~3cm大の礫含む
- 13 10YR4/4 褐色砂泥、2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥ブロック含む
- 14 5Y4/1 灰色砂泥、中砂混り、22層粘土ブロック多く含む
- 15 7.5Y3/4 暗褐色粗砂礫 φ1cm弱、ラミナあり
- 16 5Y3/1 オリーブ黒色粘土、10YR5/2 オリーブ灰黄色砂泥ブロック混り
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂、φ2cm礫少量含む、13層ブロック少量含む
- 18 5Y3/6 暗赤褐色粗砂、礫φ3~6cm多く含む
- 19 7.5YR5/5 明褐色粗砂、礫φ3cm多く含む
- 20 5Y6/1 灰色粗砂、礫φ3~8cm多く含む
- 21 10YR4/1 褐灰色粗砂、礫φ2cm少量含む
- 22 2.5Y5/2 暗褐黄色粗砂、礫φ1cm少量含む (基盤層)
- 23 2.5Y4/2 暗褐黄色粗砂、礫φ1cm少量含む (基盤層)
- 24 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂、礫φ3~5cm含む (基盤層)
- 25 7.5YR5/6 明褐色粗砂、礫φ3~6cm多く含む (基盤層)
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂、礫φ3~8cm多く含む (基盤層)

図 16 溝 36・37・95・191、落込み 190 断面図 (1 : 40)

cal649-716年である。溝95の西側に広がるSD34からは古墳時代の土器が出土しており、これ以降に堆積したものが人為的な攪拌に伴い含まれたと思われる。また、16層にはイネ属のプラントオパールが1.700/g出土しており、周辺で稲作が行われていた可能性がある。

溝194(図17) 調査区南端で検出した東西方向の溝。幅0.4m、深さは極めて浅く0.05mを測る。揚梅小路北側溝推定ライン付近で検出した。ある時期の揚梅小路北側溝あるいは内溝の可能性がある。出土遺物がなく時期は不明であるが、埋土は平安時代の遺構に近いことから、この時期の遺構と考えられる。

(5) 室町時代の遺構

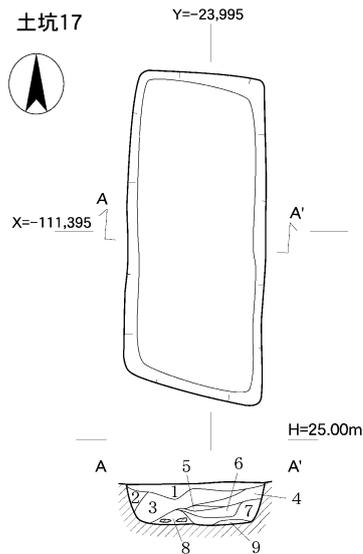
1) 土坑

室町時代の土坑は調査区の南北で検出しているが、その位置はY=-23,985～Y=-23,996の間に限られる。土坑は、いずれも平面形は方形ないしは長方形を呈し、規模から大・小2つに分かれる。前者には、土坑12・16がある。一辺約1.8m、深さ0.5mを測る。埋土は灰色砂泥を主として1～2層で人為的に埋められている。後者には、土坑17・87・94・170などがある。短辺0.6～0.9m、長辺0.8～1.5m、深さ0.25～0.3mを測る。埋土には細かい堆積が確認され、土坑94のように杵材の痕跡が確認されるものもある。前者は調査区の南部に集中し、規模と埋没状況から、土取り穴の可能性が高い。後者は北部に集中する。前者とは規模・埋没状況ともに異なっており、土取り穴以外の可能性も考えられる。以下、この規模の小さい土坑に関して以下に記す。

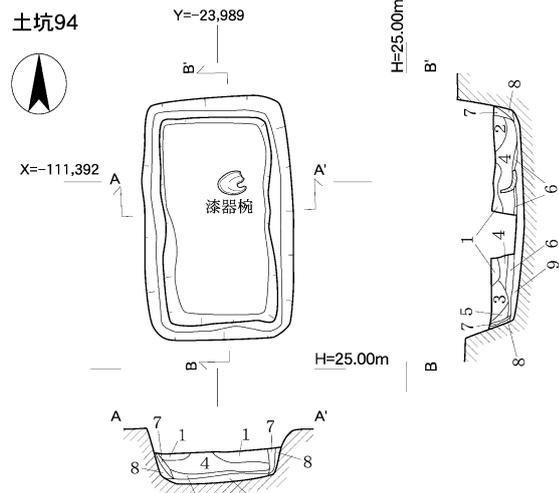
土坑17(図17) 調査区のほぼ中央、溝36の上面で検出した、南北方向の長方形土坑。南北約1.8m、東西約0.7m、深さは0.25mを測る。断面観察によると、埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰黄褐色砂泥層、下層がにぶい黄褐色砂泥層を主とする。上層は東から西へ下がり堆積する。遺物は、上下層から15世紀代の土師器小片がわずかに出土した。

土坑87(図17) 調査区のほぼ中央、土坑17の東側で検出した東西方向の土坑。南北0.6m、東西0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層は暗褐色砂泥層、下層が褐色砂泥層となる。

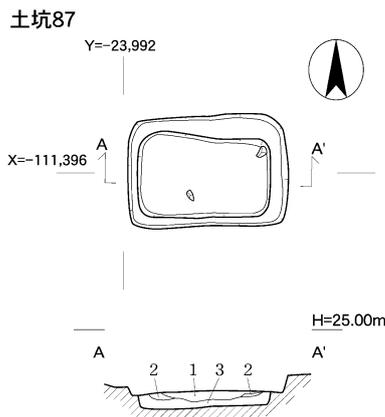
土坑94(図17、図版10) 調査区のほぼ中央、建物1の北東隅部で検出した、南北方向の長方形土坑。南北約1.3m、東西約0.75m、深さは0.2mを測る。土坑内では、四周に巡る板材の痕跡を検出している。板材の痕跡は、東西0.6m、南北1.1mを測る。埋土は大きく3層に分かれ、1～3層の上層、4・5層の中層、9層の下層となる。上層は土壌化層、中層は比較的精良な砂泥層、土坑掘形の最下層となる9層は、周辺に存在しない精良な砂泥層であり、これが床面を形成していたものと考えられる。この9層の直上で漆器椀が出土した。板材を止める杭などの痕跡は確認できないことから、小口の板材を内側に置くことによって側板を支えていたと思われる。その痕跡は確認できなかったが、この杵材が存在することから、蓋を伴っていた可能性が高い。土器は15世紀代の土器の細片が各層より出土した。板材による箱状の施設を持つことと漆器椀が出土することから、墓の可能性が高いと考えられる。



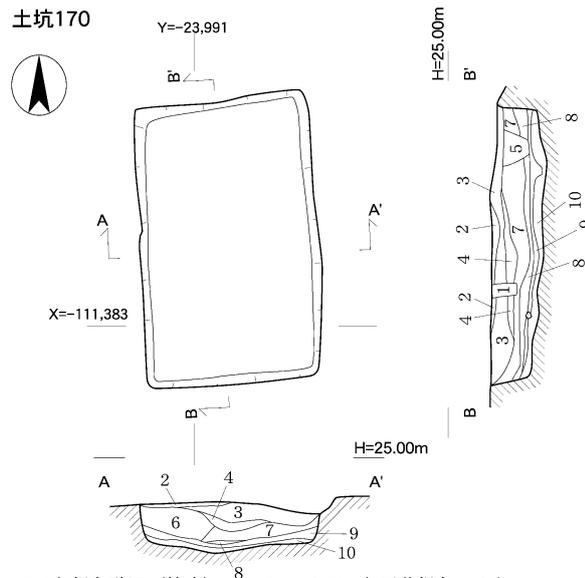
- 1 10YR4/4褐色砂泥
- 2 7.5YR4/2灰褐色砂泥
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥、細砂混り
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、細砂混り
- 6 10YR4/4褐色砂泥、φ1cm大の石含む
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥、φ1cm大の石混り
- 8 7.5YR4/2灰褐色砂泥、土器混り
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥



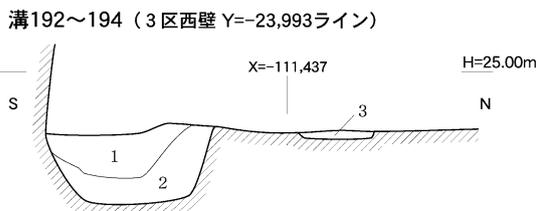
- 1 10YR5/2灰黄褐色砂泥、φ1~4cm大の礫混り
- 2 10YR5/2灰黄褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ブロック混り
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥、φ1~2cm大の礫混り
- 4 2.5YR4/3オリーブ褐色砂泥、φ0.5~2cm大の礫混り
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、φ1cm大の礫混り
- 7 2.5YR4/2暗灰黄色砂泥やや粘質、φ1cm大の礫混り（杵材痕跡）
- 8 2.5YR3/2黒褐色砂泥、7.5YR1.7/1黒色焼土多く混り
- 9 2.5YR5/2暗灰黄色砂泥



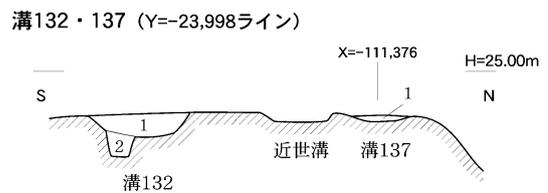
- 1 10YR3/4暗褐色砂泥、細砂混り
- 2 7.5YR4/4褐色砂泥
- 3 10YR4/4褐色砂泥



- 1 7.5YR4/4褐色砂泥（杭痕）
- 2 7.5YR4/3褐色砂泥（土壌化層）
- 3 7.5YR3/4暗褐色砂泥
- 4 10YR3/4暗褐色砂泥
- 5 10YR4/4褐色砂泥
- 6 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
- 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 10 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥



- 1 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥（溝192）
- 2 2.5YR4/2暗灰黄色砂泥やや粘質、10YR4/6褐色粘質土混り（溝193）
- 3 2.5YR4/4オリーブ褐色砂泥（溝194）



- 1 7.5YR4/3 褐色砂泥、φ1~3cmの礫含む
- 2 7.5YR4/4 褐色砂泥

図17 土坑17・87・94・170実測図、溝132・137・192~194断面図（1：40）

土坑 170(図 17) 調査区北西部で検出した南北方向の長方形土坑。南北約 1.5 m、東西約 0.9 m、深さは約 0.3 mを測る。埋土は大きく 3 層に分かれ、1～5 層の上層、6・7 層の中層、8～10 層が下層となる。規模と堆積状況は、土坑 94 とに近いが、杵材の痕跡がないことと小土器片以外の遺物の出土がない点が異なる。

2) 溝

室町時代の溝は、調査区南端の溝 192・193 と北西部の溝 132・137 などがある。いずれも東西方向の素掘り溝である。溝 192・193 は平安時代の揚梅小路北側溝推定ライン近くで検出しており、溝 132・137 はこれから約 60 m (30 丈) 北で検出している。周辺に建物などの遺構はなく、耕作地の区画を形成するものと考えられる。

溝 132・137 (図 17) 溝 132 は調査区北西部で検出した東西方向の溝。幅 0.5 m、深さ 0.15 mを測り、溝の南端はさらに 0.1 m断面箱形に掘られる。溝 137 は、溝 132 の 0.8 m北側で検出した東西方向の溝。幅 0.3 m、深さ 0.08 mを測る。

これらの溝と近世の同様の溝を、競馬場濠を挟んで東側延長部分で検出しており、繰り返し同じ所が土地の境界となっていたことがわかる。溝 132・137 は、2 条一対となってこの間に畦畔を形成していたと考えられる。

溝 192・193 (図 17、図版 10) 調査区南端で検出した南北方向の溝。溝 192 は幅約 0.8 m、深さ 0.15 mを測り、溝底は東から西へ下がる。溝 193 は溝 192 の下層で検出した東西方向の溝。幅約 0.9 m、深さ 0.4 mを測り、溝底は東から西へ下がる。溝 192 は溝 193 の掘り直されたものとみられる。

3) その他の遺構

落込み 190 (図 16) 調査区北西部で東西約 1 m、南北約 7 mを検出した。この落込みは平面形が方形と考えられる凹地である。深さ 0.1 mを測る。埋土は、極めて均質な砂泥層で塊状を成す。また、落込みの東肩に沿って幅 0.4 m、深さ 0.1 mの南北方向の溝 191 を検出しており、畦畔際の溝の可能性もある。いずれからも 11 世紀代の土器が出土する。遺物は 11 世紀代のものしか出土しないが、検出面積が限られており時期の特定は難しい。

遺構の形状から、水田遺構の可能性が考えられる。埋土の自然化学分析を行ったが、風化のためかプラントオパール・花粉共に量が少なく、性格は明らかではない。

註

- 1) 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に43箱が出土した。内容は土器類、瓦類、木製品、金属製品などがあるが、ほとんどが土器類である。時代別では弥生時代・古墳時代・平安時代・室町時代・江戸時代の遺物が出土し、平安時代が多くを占める。遺物は小片が多く、図示できるものは少ない。以下に述べる遺物には、遺構の年代よりも古いと思われるものも含まれるが、調査地の土地利用のあり方を一定反映するものと考えられ、それも含めて紹介することとする。

(2) 土器

1) 平安時代前期から中期 (図18、図版11)

1・2は門1の柱穴より出土した。1は須恵器杯B蓋である。つまみ部の形態は扁平で不均整である。胎土には0.5mm大の長石を含み、緻密さはない。色調は白みを帯びた灰色を呈する。柱穴47柱痕跡より出土した。2は土師器皿の口縁部である。口縁端部下に横方向ナデを施し、口縁部は弱く外反する。器壁は3mm弱と薄い、磨滅が激しく本来これよりも厚かった可能性もある。色調は橙褐色である。平安京土器編年のⅡ期中～新である。柱穴47掘形より出土した。

3は土師器皿である。口縁端部下に横方向のナデを施し、口縁部は強く外反する。器高は低い。胎土には0.5～1mmの長石を多く含み、色調は赤褐色を呈する。建物6北側柱列柱穴の柱痕跡より出土した。

4は土師器皿Cである。口縁部は横方向のナデにより弱く外反する。1mm大の長石を含み、色調は橙褐色を呈する。口縁端部に煤が付着する。建物1の柱穴19掘形より出土した。

5は須恵器杯Bである。高台は低く断面方形を呈する。胎土は緻密であるが、白色細粒をわずかに含む。焼成は硬質である。建物5の柱穴154掘形より出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類、木製品		土師器4点、須恵器5点、緑釉陶器6点、平瓦1点		
平安時代後期	土師器、軒丸瓦		土師器7点、白磁1点、軒丸瓦1点		
室町時代	土師器		土師器13点		
近代	陶磁器、金属製品		蹄鉄1点		
合計		47箱	39点(2箱)	2箱	43箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

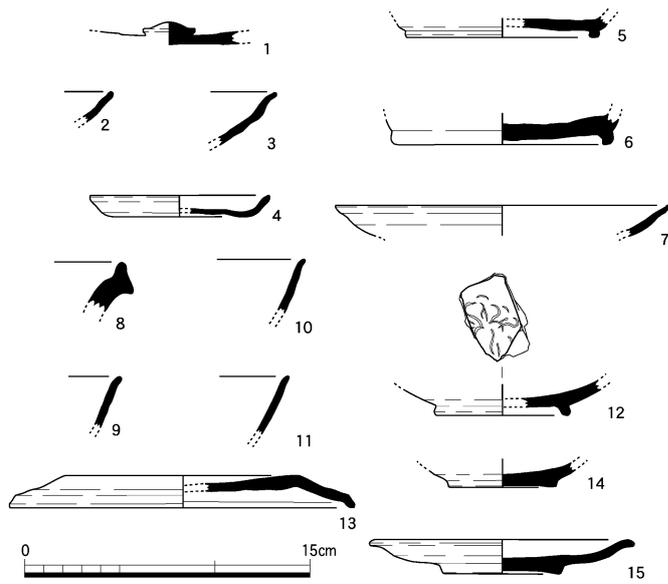


図 18 平安時代出土土器実測図 (1 : 4)

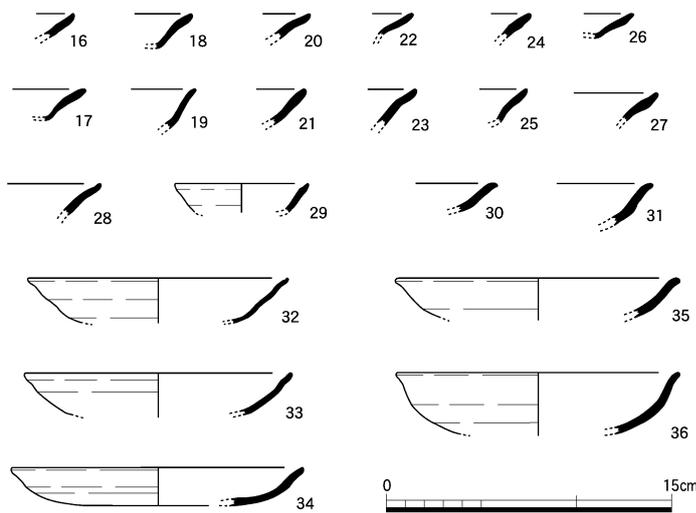


図 19 平安時代後期・室町時代出土土器実測図 (1 : 4)

10～12は溝36より出土した。10は緑釉陶器碗である。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。胎土には0.5mmの長石を含み、色調は灰白色を呈する。焼成は硬質である。釉調は淡緑色を呈する。釉層は薄く、刷毛むらがある。11は緑釉陶器碗である。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。胎土には0.5mmの長石を含み、色調は灰白色を呈する。釉調は深緑色を呈する。釉層は薄く、塗りむらが顕著である。焼成は硬質である。12は緑釉陶器皿である。高台は縦方向にやや長い断面方形を呈する貼り付け高台である。内面底部の印刻花文は、S字形線を基調として描かれている。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まず、色調は灰白色を呈するが、9～11よりも明るい。釉調は深緑色を呈し、釉層は厚い。焼成は硬質である。

13～15は溝95の14層より出土した。13は須恵器杯B蓋である。天井部は平坦である。屈曲する口縁部は、直線的に外側に開き、端部は外下方に突出する。自然釉が天井部に厚く付着する。

6は須恵器杯Bである。高台は断面方形を呈し、端部はわずかに内側に内傾する。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まない。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。建物4の柱穴48より出土した。

7は土師器皿である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は小さく上方に突出する。器壁面の磨滅が激しく、調整は不明である。胎土には0.3～1mmの長石を多く含む。色調は橙褐色を呈する。建物4の柱穴42より出土した。

8・9は溝37より出土した。8は須恵器壺である。口縁端部は上方に摘み上げる。胎土には0.1～0.3mmの長石を含む。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。9は緑釉陶器碗である。口縁部は外反し、端部はやや厚みをもって丸く収まる。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まず、色調は灰白色を呈する。焼成は硬質である。釉調は深緑色を呈する。釉層は薄く、刷毛むらがある。

胎土には 0.3 mm 大の長石をわずかに含み、色調は灰色を呈する。焼成は硬質である。14 は緑釉陶器である。高台は削り出しによる円盤状高台である。胎土は緻密で 0.3 mm 大の長石をわずかに含む。釉調は淡緑色を呈するが、磨滅によりほとんどが剥離している。焼成は軟質である。15 は緑釉陶器皿である。高台は削り出しによる円盤状高台である。体部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。胎土は緻密で 0.3 mm 大の長石をわずかに含み、色調は灰色を呈する。釉調は深緑色を呈し、薄く全面に施釉するが、刷毛むらが著しく、内面にはほとんど施釉されない。焼成は硬質である。

2) 平安時代後期・室町時代中期 (図 19、図版 11)

16～19 は溝 192 から出土した。16～18 は土師器皿である。16・17 は赤色系、18 が白色系で、いずれも口縁部は強く屈曲し器壁は薄い。19 は白磁皿である。口縁部は強く屈曲し、端部は外反する。口縁端部から屈曲部にかけて縦方向の圧痕を付しており、輪花状を呈すると思われる。太宰府分類の白磁 XI 類である。

20～23 は溝 134 から出土した土師器皿である。20・23 は白色系で、口縁部は外反し端部は上方につまみ上げる。21・22 は赤色系である。胎土には長石、クサリレキを多く含む。

24～26 は土坑 17 から出土した土師器皿である。24・26 は白色系、25 は赤色系である。24 は口縁部の器壁は厚く、端部は丸く収まる。

27 は土坑 94 から出土した土師器皿である。口縁部が外反し、端部は小さく上方につまみ上げる。赤色系である。

28・29 は土坑 170 から出土した土師器皿である。いずれも白色系である。28 は口縁部が外反し、端部は小さく上方につまみ上げる。29 は小皿である。他のものに較べ器壁は薄く、色調も他のものが灰白色であるのに対し、白色である。

30・31 は整地層 210 から出土した土師器皿である。口縁部は横方向の 2 段ナデを施し外反する。

32～36 は落込み 190 から出土した土師器皿である。いずれも器面の磨滅が著しい。32・33 は口縁部が強く外反し、端部は上方につまみ上げる。器壁は薄く、色調は橙褐色を呈する。34～36 の口縁部は、横方向の 2 段ナデを施し外反する。胎土は 1 mm 大の長石を含む。

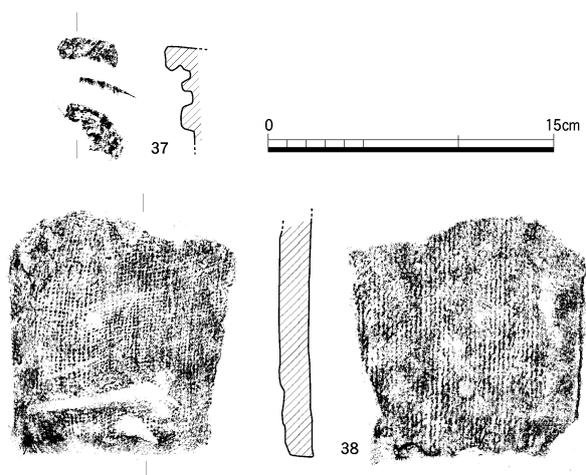


図 20 瓦拓影・実測図 (1 : 4)

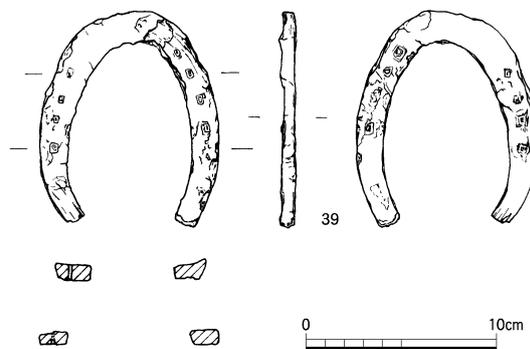


図 21 蹄鉄実測図 (1 : 4)

(3) 瓦 (図 20)

37は巴文軒丸瓦である。巴の巻方向は右巻きである。胎土は緻密で0.5mmの長石をわずかに含む。焼成は軟質で、色調は内外断面共に黒色を呈する。柱穴 176 抜き取り穴より出土した。

38は平瓦である。凸面は縦方向の縄叩き、凹面の布目は乱れが少ない。側面のヘラ削りは2回に分けて行われている。胎土には0.5mm大の長石を少量含む。色調は内外断面共に灰色を呈する。焼成は硬質である。土坑 17より出土した。

(4) 鉄製品 (図 21)

39は明治時代の島原競馬場の濠から出土した蹄鉄である。いわゆる遺構からの出土ではないが、当地の歴史の変遷を知る上で興味深い資料である。縦 11.5 cm、横 9.2 cm、厚さ 7 mmを測る。釘穴が左右に4箇所ずつ、計8箇所穿たれている。釘が残る物もある。

参考文献 (土器の記述に関しては以下の文献を参照した。)

〈平安京・京都の土器編年〉

・平尾政幸「平安時代前期の土器」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年

・小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

〈緑釉陶器の編年〉

・平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店 1994年

・『古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会 1994年

・『古代の土器研究会 第7回シンポジウム 古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会 2003年

〈輸入陶磁器〉

・『太宰府条坊跡XV —陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会 2000年

5. ま と め

今回の調査地である平安京右京六条一坊十四町の調査は、数えて第5回目¹⁾の調査となる。面積において十四町の半分以上を調査したことになる。平安時代を主として弥生時代から室町時代の遺構を検出した。特に9世紀代の宅地については、これまでの調査成果と合わせると、平安京の調査の中でも全体像を把握できる貴重な例となった。ここでは、各時代毎にその様相についてまとめてみたい。

なお、1992年に行われたXF7次調査は、これまでは概要報告のみが報告されているのみであった。十四町内における平安時代の宅地の主要部分でもあるため、この調査で明らかとなった遺構・遺物を紹介しながら、調査地の歴史的な変遷を述べる。

(1) 弥生時代 (図 22・23)

遺構の項で述べたように、今回の調査成果から弥生時代の遺構と比定できるものはない。しかし、XF7次調査では、弥生時代中期後葉の溝SD180を検出している。これと今回の溝204(XF7次調査 SD180B)は一連のものであることを確認しており、弥生時代の遺構が存在したことがわかる。SD180は幅2.8～3.3m、深さ0.4～0.5mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層からは平安時代の整地時に含まれたと考えられる9世紀前半の土器類(図27-45)が、下層からは弥生時代中期後葉の土器類(図27-47～51)が出土する。溝底の高低差はそれ程ないが、北東から南西に低くなる。検出部分のやや南北中央の南寄りの地点で、溝内で杭列を検出している。この杭を境にして、SD180Bが分岐して南西へと続く。SD180とSD180Bの接点に位置する杭列は、杭が溝と平行して列を成すものと直交して並ぶものがある。直行する杭列の杭は、下流側から上流側となる南西から斜めに打たれている。溝204の底面の標高はSD180よりも約0.4m高く、SD180の杭列は、水位をあげ溝204に導水させる為の堰と考えられる。これらのことからSD180は、灌漑機能を備えた弥生時代中期後葉の溝と考えられる。また、SD180北西側にこれに平行してSD184が存在する。SD184もSD180と繋がっていた痕跡が認められ、出土遺物も同様の様相であることから、水を分流する溝と考えられる。また、SD180BとSD184の2条の溝の間にも同様の溝SD180Cがある。これらの溝は、同一方向であり、用水の必要性から考えると同時併存は考えがたい。堰の損壊とともに段階を違えて掘削された可能性がある。

周辺調査では、弥生時代の顕著な遺構はないが、流路などから遺物が出土している²⁾。SD180の東側250mの地点で、流路SX15(XF8次調査)から縄文時代晩期から古墳時代の遺物が出土している³⁾。弥生時代の遺物は、前期から後期までの土器が出土し、量的には中期のものが多い。また、この調査地の南側(XF2次調査)でも湿地状の堆積土から、縄文・弥生・古墳時代の土器と共に石斧・石包丁などが出土している⁴⁾。調査地の西側でも弥生時代の遺物は出土するものの、量的には少量で、土器も小片が多い⁵⁾。遺物の出土が集中するのは、調査地から東側約300mの範囲である。調査地周辺の地形をみると、現在の西高瀬川を境として東西で高低差があり、西側は一段低く、調査地を含む東側は一段高い平坦面が広がっている。この西高瀬川の約300m西側が

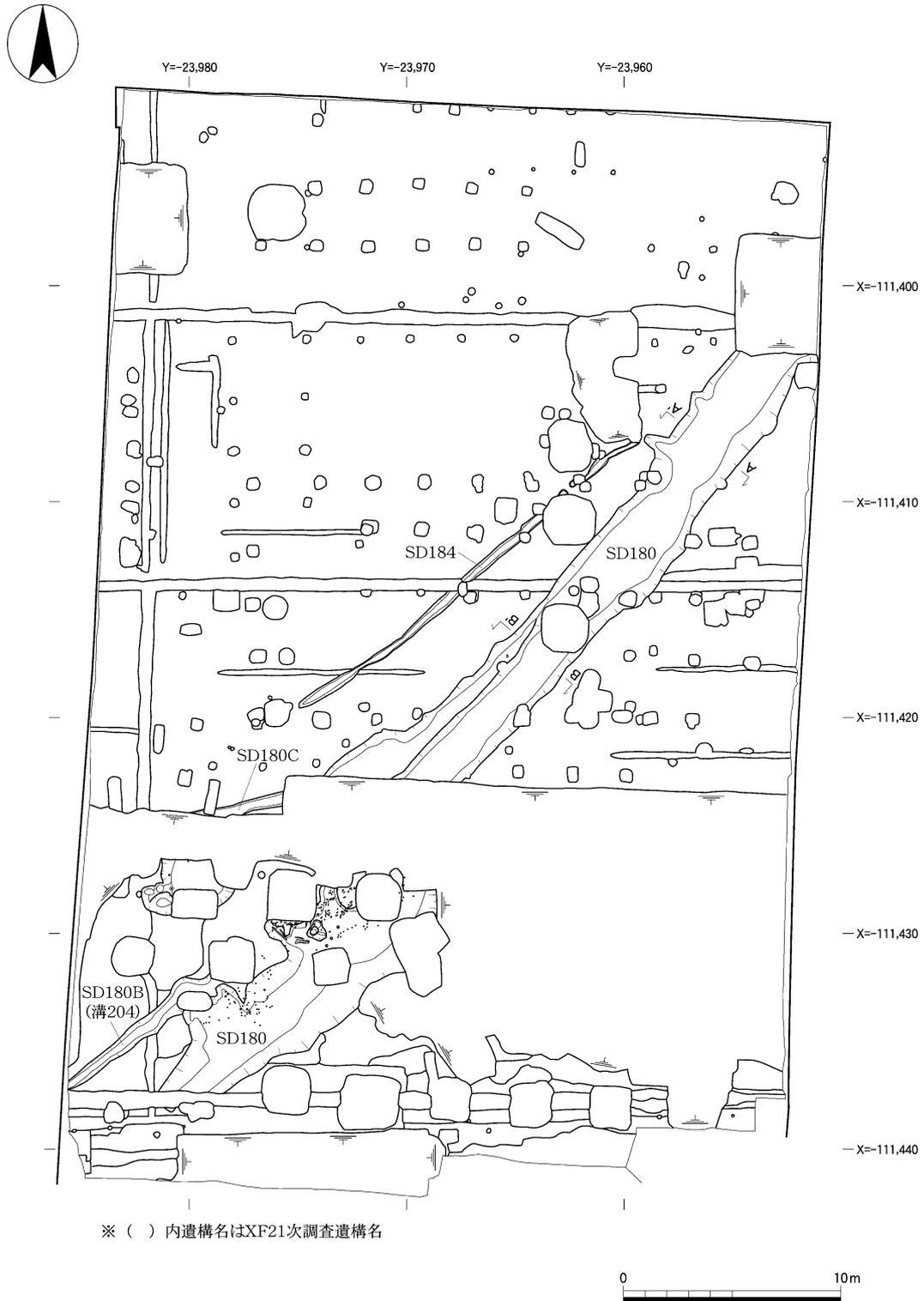
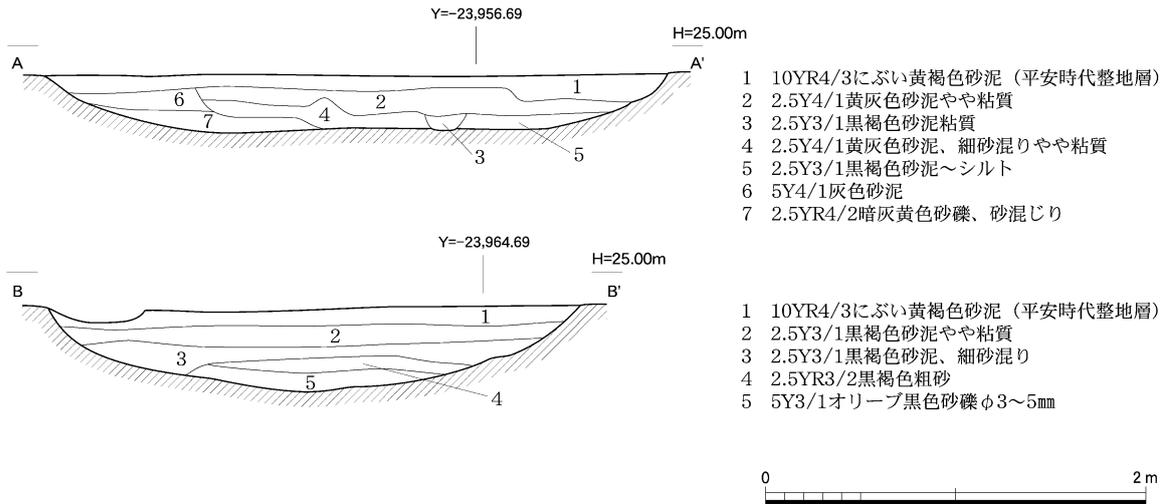


図22 XF 7次調査弥生時代遺構平面図 (1 : 300)



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（平安時代整地層）
 - 2 2.5Y4/1黄灰色砂泥やや粘質
 - 3 2.5Y3/1黒褐色砂泥粘質
 - 4 2.5Y4/1黄灰色砂泥、細砂混りやや粘質
 - 5 2.5Y3/1黒褐色砂泥～シルト
 - 6 5Y4/1灰色砂泥
 - 7 2.5YR4/2暗灰黄色砂礫、砂混じり
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（平安時代整地層）
 - 2 2.5Y3/1黒褐色砂泥やや粘質
 - 3 2.5Y3/1黒褐色砂泥、細砂混り
 - 4 2.5YR3/2黒褐色粗砂
 - 5 5Y3/1オリブ黒色砂礫φ3～5mm

図 23 XF 7 次調査 SD180 断面図（1 : 40）

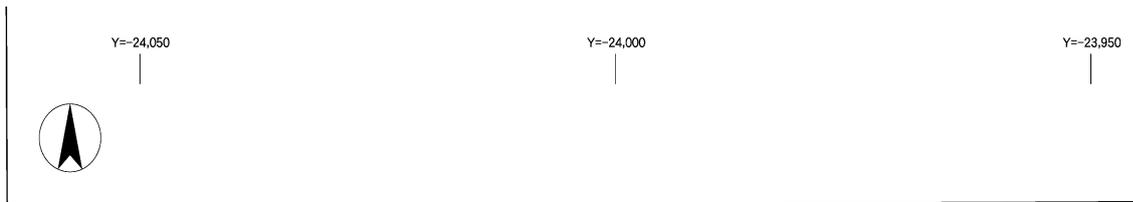
平安時代の西堀川小路となる。第 2 章の位置と環境でも述べたように、調査地は鴨川扇状地の西端部に位置し、この西側には埋没河川の存在が想定され、地形の変化点になっている。今回の調査区の遺構面を形成する基盤層を見ると、溝 95 を境として、基盤層を構成する土質が変化している。西側が径約 10 cm 大の礫を主とする砂礫層、東側が厚さ約 1 m の黄褐色砂泥層となっている。アスファルトに覆われている現況では、細かな旧地形は窺いがたいが、調査地から東側、より細かくは溝 95 東側の平坦面は、扇状地端部にある台地状地形の先端部と考えられる。

調査地周辺で、弥生時代前期から後期の遺物が集中して出土するのは、このような立地に基づいた弥生時代の集落が継続して存在したことによると考えられる。弥生時代の遺構は、平安時代以降の土地改変によりほとんどが失われてはいるものの、SD180 はこの台地上に掘られた灌漑水路であり、前期から続く弥生集落に、中期後葉の段階で灌漑方法のあり方に大きな変革が存在した可能性を示す。また、この当時の居住域は調査地を含めたこれより東側、西側は SD180 により灌漑が施された水田域と考えられる

（2）平安時代前期から中期（図 24 ～ 26）

この時期は、遺構・遺物から 4 時期に分けることができる（図 28）。I 期は 9 世紀前半、II ～ IV 期は 9 世紀後半である。II ～ IV 期の遺構は 9 世紀代の掘立柱建物が主である。建物遺構の柱穴から出土する遺物は、9 世紀後半のものがほとんどであり、遺物から遺構の前後関係を知ることはできない。柱穴の重なり（いわゆる切り合い関係）や建物方位、これまでの調査成果と合わせて、平安時代の遺構の変遷を述べる。なお、ここでは溝 95（XF10 次調査 SD34 内の流路 1）の東側に遺構のまとまりがみられることから、この範囲の遺構を中心に述べる。

I 期 この時期の遺構としては、XF10 次調査で検出した SE39、SD34、SD34 内の流路 1、SA44 と今回調査の溝 95 がある。SD34 は平安時代以前の流路を主とすると思われるが、後の時代の溝あるいは流路が複雑に重なっており、時期毎に遺構の幅を確認することはできない。溝 95



六条坊門小路

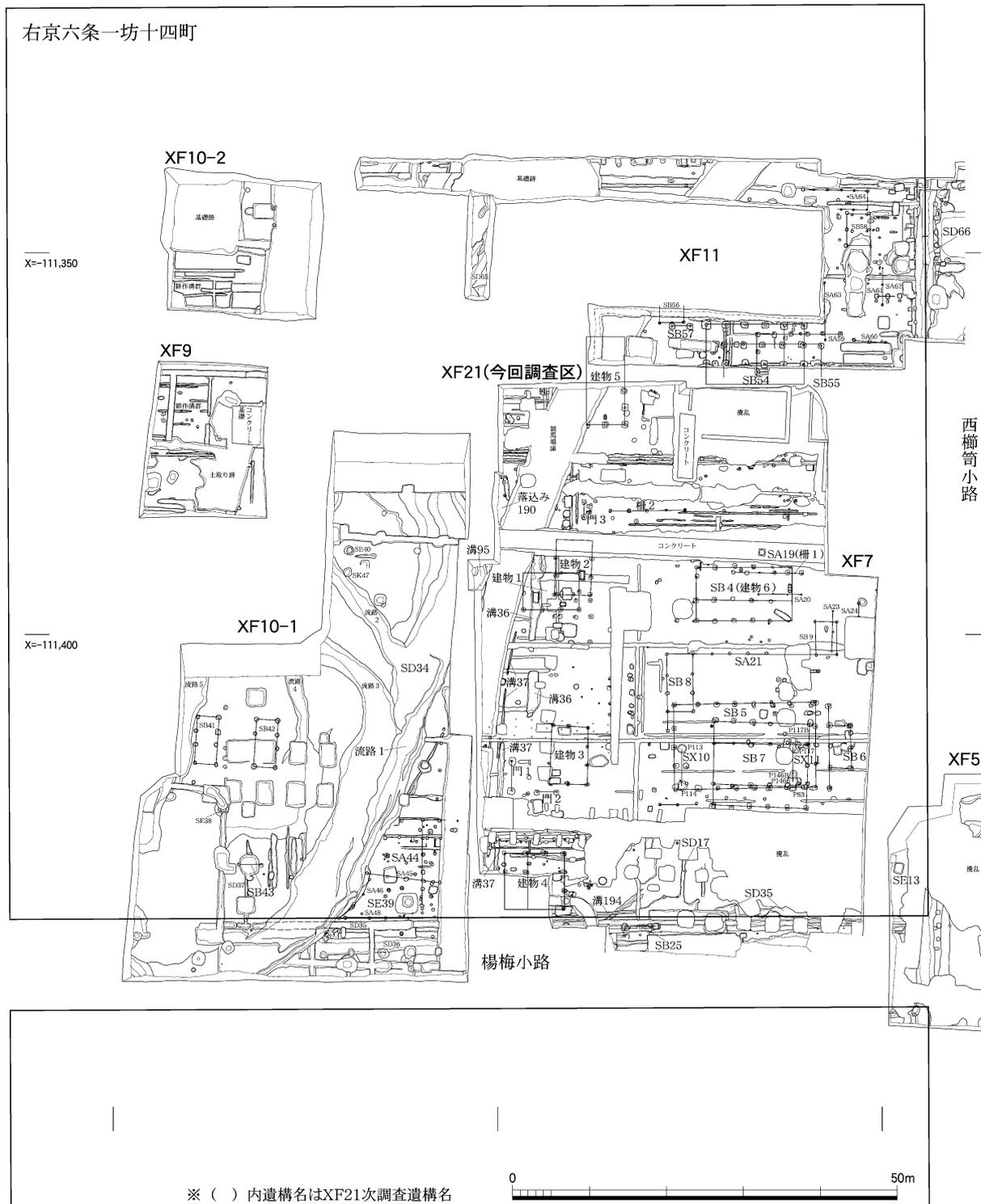


図 24 右京六条一坊十四町平安時代遺構配置図 (1 : 800)

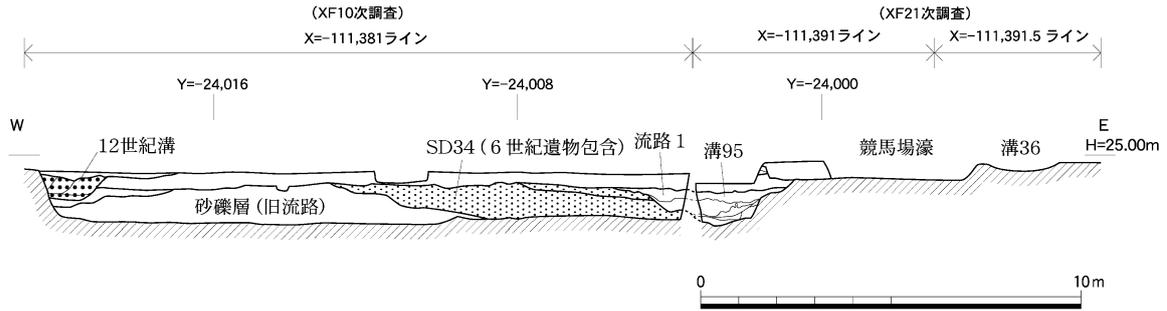


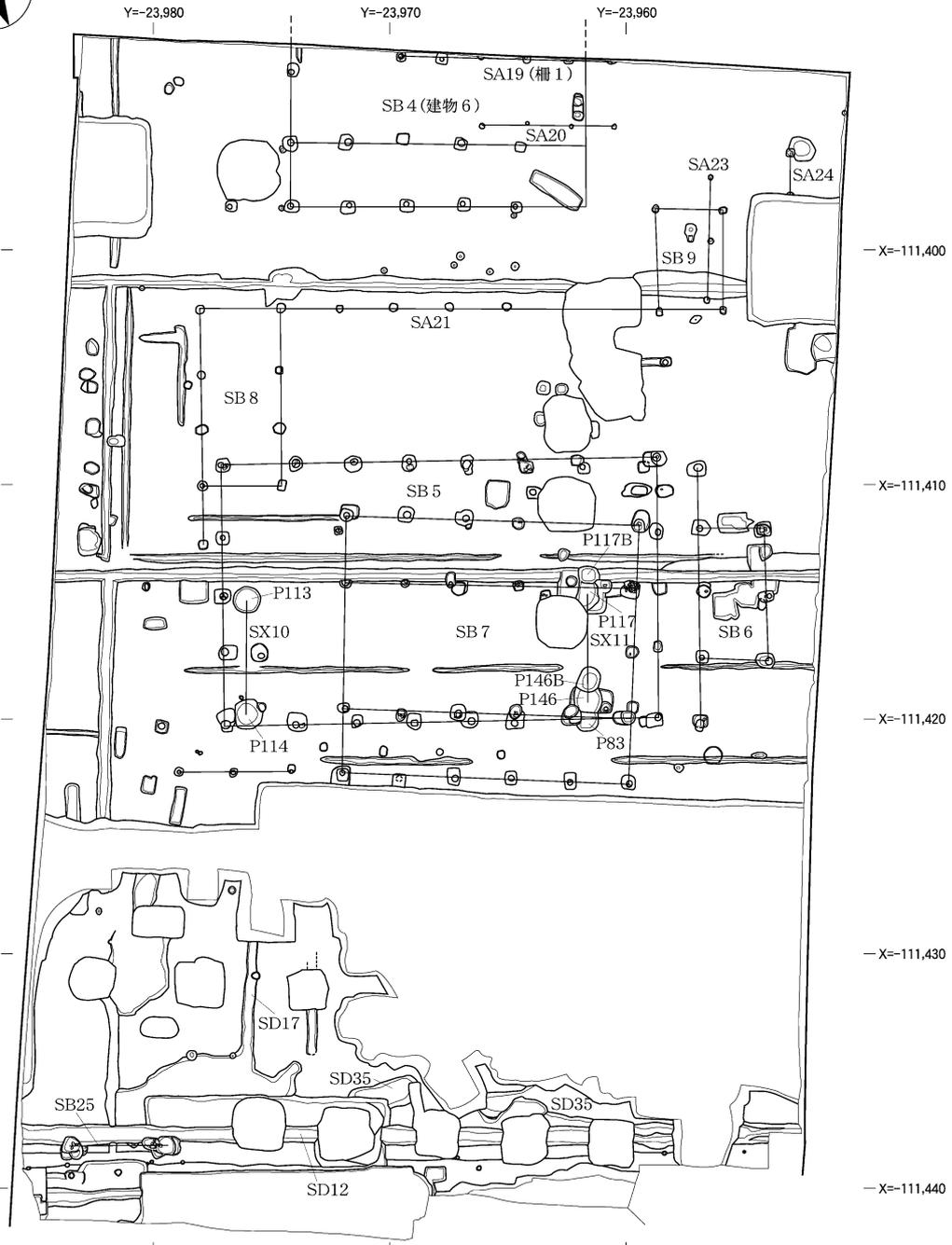
図 25 XF10 次調査 SD34、XF21 次調査溝 95 断面図 (1 : 200)

は、SD34 の東端に人工的に掘削されたもので、XF10 次調査の流路 1 と同一遺構である。溝 95 からは、9 世紀前半の土器が 14 層を主としてこれより上層で出土し、これより下層の堆積時期は明らかではない。16 層の粘質土からはイネのプラントオパールが一定量産出しており、周辺に存在した水田から流入したものである可能性が高い。溝 95 の掘削時期は明らかではないが、ある時期に、扇状地先端部台地状地形と氾濫原状の地形の変化点に掘削された、用排水に伴う溝とも考えられる。

XF10 次調査の流路 1 からは、9 世紀前半の遺物がまとまって出土するが、位置的には SE39 の西側に集中しており、何らかの関係が想定される。これらの遺物の中には、「寮」「厨」「水取連カ」と墨書された須恵器がある。「水取」は宮内省被官の主水司を、あるいは、「水取連」とすれば連姓を表すこととなる。「寮」「厨」の墨書土器が十四町で使用されたものとすれば、この時期、何らかの官衙が、井戸を備えた施設を管理していた可能性がある。

Ⅱ期 この時期の遺構として、XF 7 次調査の SB 8、SA19・21、SD17・35、SX10・11、XF10 次調査の SB43、XF11 次調査の SB57、今回調査の門 1～3、溝 36 などがある。遺構方位は正方位である。SX11 は柱穴の重なりから、SB 5・SB 7 に先行することが確認されている。また、溝 36 も同様に建物 1 に先行しており、Ⅲ期の遺構よりも古いことがわかる。SD35 は、揚梅小路北築地付近で検出した不整形な溝。内溝の可能性もある。9 世紀の前半から後半の土器が出土する。

この時期の遺構で最も特徴的な遺構に門がある。SX10・11、SB43・57、門 1～3 など十四町内で 7 基が検出している。これらは検出位置が十四町の境界ではなく、いずれも町内にあることから、一般的な宅地の出入り口の門とは考え難い。門 1・SX10・SX11 は西から 22.2 m、14.4 m の距離を取りながら、東西にほぼ一直線に並ぶ。このうち、SX10 は、四行八門の東一行と二行の推定界線上にあることから、これが基準となって他の 2 基が設置されたと考えられる。また、SB 8 とこれに取り付く SA21 は SX10 に近接しており、付属する施設の可能性がある。このような遺構配置から門 1・SX10・SX11 を結ぶ通路の存在が想定される。また、平面形が L 字形を呈する SA21 はこの南東部を囲んでおり、これ以外の空間とは分化されていたと思われる。すなわち、SA21 の南端に位置する SX10 の西と東では、空間が分けられていた可能性がある。このような遺構の性格は明らかではないが、何らかの祭祀・儀礼に伴う可能性もある。この 3 基以外の門に



※ () 内遺構名はXF21次調査遺構名



図 26 XF 7次調査平安時代遺構平面図 (1 : 300)

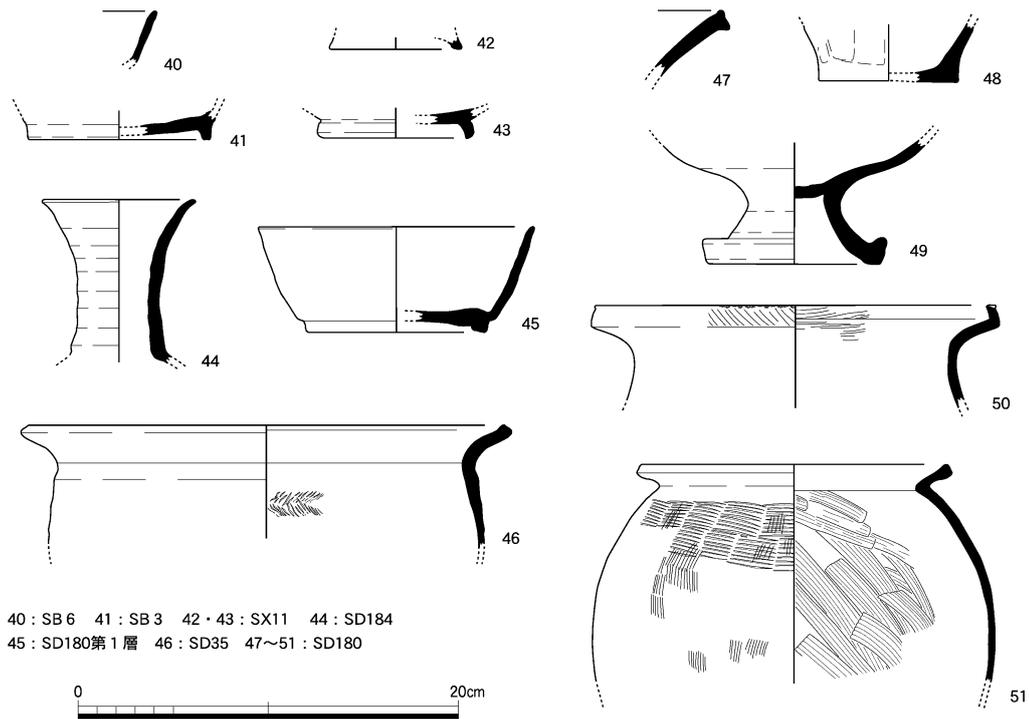


図 27 XF 7次調査出土土器実測図（1：4）

相互関連があるかどうかは不明である。これらと類似の遺構は、右京三条三坊四町のSB16があり、今後の検討を要する。⁶⁾

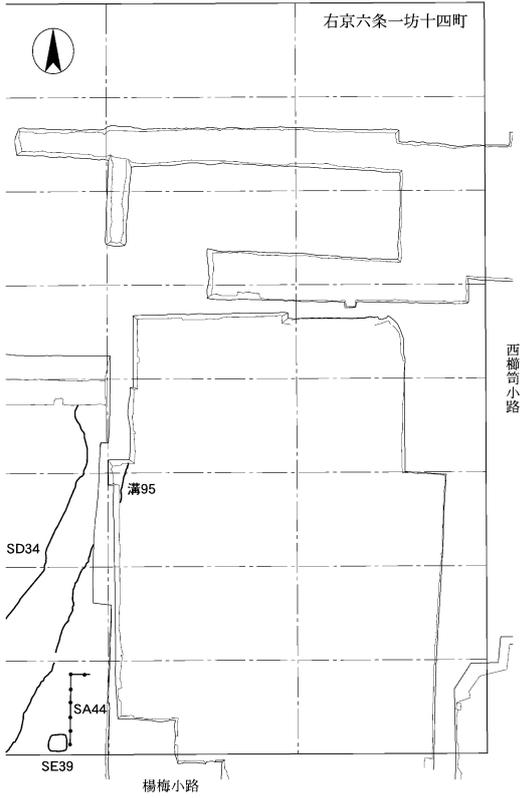
Ⅲ期 十四町の東半2分の1町規模の宅地として土地利用がなされ、最も遺構の集中する時期である。この時期の遺構として、XF 7次調査のSB 4～6・25、XF11次調査のSB54・55、今回調査の建物1・4・5、柵2などがある。建物方位は座標軸に対して正方位である。これらの建物群は、柵2を境として大きく南北に分かれる。南半部は、主殿であるSB 5を中心とした空間であり、建物規模と位置からさらにSB 4・5と建物1・4の東西2つに分かれる。北半部は、SB54を中心とした家政機関としての機能を持つと思われる空間である。SB 5は東西棟の四面庇建物で、建物面積は十四町検出建物の中で最大である。掘立柱の底部分のみを検出しており、身舎は礎石構造と考えられる。身舎礎石建の建物は平安京内では、右京一条三坊一六町の9世紀前半のSB52⁷⁾、右京三条二坊十五町の9世紀後半の建物1⁸⁾、右京六条二坊三町の9世紀後半の建物5⁹⁾などでいくつか確認されており、京内建物に礎石建物が一定普及していたことを示す。しかし、一方で今回の十四町南側の十三町では、9世紀後半の1町規模宅地の主殿として、4面庇建物を確認しているが、これは身舎を含めて掘立柱建物である¹⁰⁾。10世紀代に成立するとされる寝殿造りの構成要素の一つに建物の礎石構造があるが、9世紀代の平安京の身舎の礎石建物の採用は、宅地規模・建物規模・時期によって決定されるのではなく、個々の理由によって異なるようである。

SB 4は、SB 5の後殿にあたる。SB 4の東西両妻の南延長線がSB 5身舎の両妻が揃い、両者に強い相関関係が存在したことを窺わせる。

揚梅小路に面して建つSB25は宅地の出入り口となる門である¹²⁾。3回の建て替えが確認される。

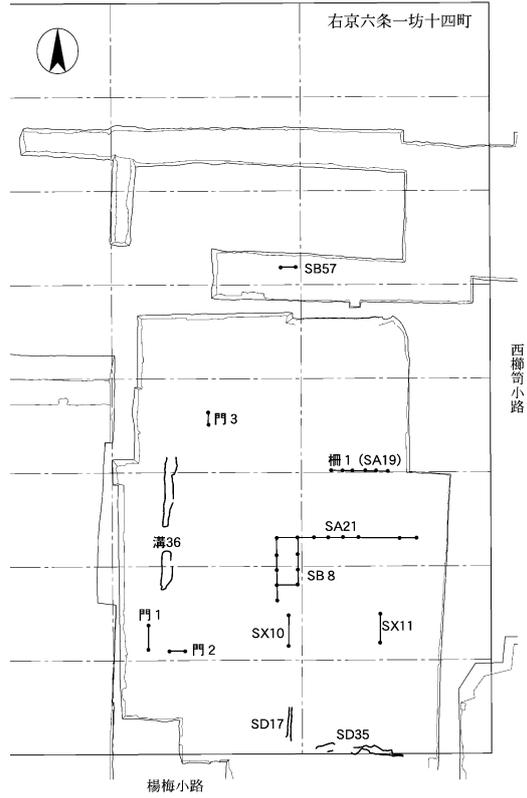
I 期

六条坊門小路



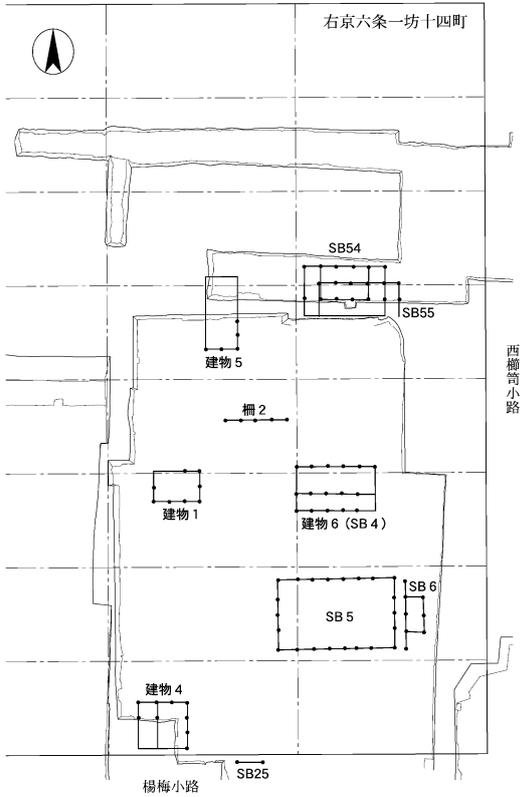
II 期

六条坊門小路



III 期

六条坊門小路



IV 期

六条坊門小路

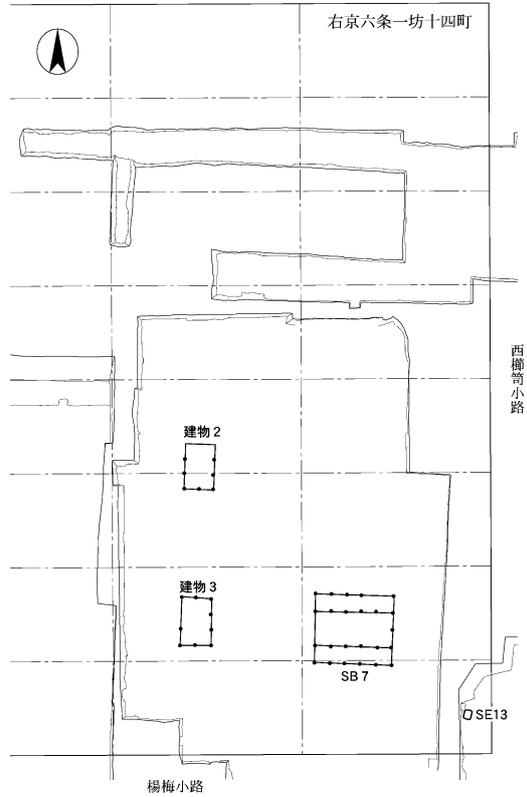


図 28 右京六条一坊十四町東半部遺構変遷図 (1 : 1,200)

表3 右京六条一坊十四町建物一覧表

遺構名	身舎梁間		身舎桁行		梁間柱間		桁行柱間		庇		庇の出		建物面積	柱掘形規模	建物方位	調査記号
建物1	4.8m	2間	7.2m	3間	2.4m	8尺	2.4m	8尺	-	-	-	34.6㎡	0.6m	東西棟	08HK-XF21	
建物2	4.5m	2間	7.2m	3間	2.25m	7.5尺	2.4m	8尺	-	-	-	32.4㎡	0.6m	南北棟	08HK-XF21	
建物3	4.5m	2間	7.2m	3間	2.25m	7.5尺	2.4m	8尺	-	-	-	32.4㎡	0.6m	南北棟	08HK-XF21	
建物4	4.8m	2間	7.2m	3間	2.4m	8尺	2.4m	8尺	西庇	2.7m	9尺	54.0㎡	0.4×0.7m	南北棟	08HK-XF21	
建物5	5.1m	2間	4.5m以上	3間以上	2.55m	8.5尺	2.25m	7.5尺	不明	-	-	23.0㎡以上	0.9m	南北棟	08HK-XF21	
建物6 (SB4)	4.2m	2間	12.0m	5間	2.1m	7尺	2.4m	8尺	南庇	2.7m	9尺	82.8㎡	0.6m	東西棟	92HK-XF7	
SB5	4.8m	(2間)	12.0m	(5間)	2.4m	(8尺)	2.4m	(8尺)	四面庇	3.0m	10尺	194.4㎡	庇0.7m	東西棟	92HK-XF7	
SB6	2.7m	1間	5.4m以上	2間以上	2.7m	9尺	2.7m	9尺	-	-	-	14.6㎡	0.8m	東西棟	92HK-XF7	
SB7	5.4m	2間	12.0m	5間	2.7m	9尺	2.4m	8尺	両面庇	2.7m	9尺	129.6㎡	0.6m	東西棟	92HK-XF7	
SB8	3.3m	1間	7.65m	3間	3.3m	11尺	2.55m	8.5尺	-	-	-	25.2㎡	0.4m	南北棟	92HK-XF7	
SB9	2.7m	1間	4.2m	1間	2.7m	9尺	4.2m	14尺	-	-	-	11.3㎡	0.3m	南北棟	92HK-XF7	
SB41	2.7m	1間	6.3m	3間	2.7m	9尺	1.8~2.7m	6~9尺	-	-	-	17.0㎡	0.6m	南北棟	94HK-XF10	
SB42	2.7m	1間	6.3m	3間	2.7m	9尺	1.8~2.7m	6~9尺	-	-	-	17.0㎡	0.6m	南北棟	94HK-XF10	
SB54	5.4m	2間	7.2m	3間	2.7m	9尺	2.4m	8尺	三面庇	2.7m	9尺	68.0㎡以上	1.0m	東西棟	02HK-XF11	
SB55	2.55m	1間以上	12.75m	5間	2.55m	8.5尺	2.55m	8.5尺	-	-	-	32.5㎡以上	0.9m	東西棟	02HK-XF11	
SB56	3.0m	2間	-	-	1.5m	5尺	-	-	-	-	-	-	0.3m	南北棟	02HK-XF11	
SB58	4.2m	2間	3.3m	1間	2.1m	7尺	3.3m	11尺	-	-	-	13.9㎡	0.3m	南北棟	02HK-XF11	
SX10	-	-	4.8m	1間	-	-	4.8m	16尺	-	-	-	-	1.0~1.2m	南北棟	92HK-XF7	
SX11	-	-	4.5m	1間	-	-	4.5m	15尺	-	-	-	-	0.9~1.2m	南北棟	92HK-XF7	
門1	-	-	3.9m	1間	-	-	3.9m	13尺	-	-	-	-	0.9m	南北棟	08HK-XF21	
門2	-	-	2.4m	1間	-	-	2.4m	8尺	-	-	-	-	0.6m	東西棟	08HK-XF21	
門3	-	-	2.1m	1間	-	-	2.1m	7尺	-	-	-	-	0.6m	南北棟	08HK-XF21	
SB25	-	-	3.9m	1間	-	-	3.9m	13尺	-	-	-	-	0.7~0.9m	東西棟	92HK-XF7	
SB43	-	-	3.0m	1間	-	-	3.0m	10尺	-	-	-	-	0.6m	東西棟	94HK-XF10	
SB57	-	-	2.4m	1間	-	-	2.4m	8尺	-	-	-	-	0.8m	東西棟	02HK-XF11	

※()は推定

ここから約54m(18丈)北側に柵2が位置する。この2つの遺構を結ぶライン上には遺構がなく、この部分は、宅地内の通路としての機能を持っていたと思われる。このラインの西側には、建物1と建物4が南北に分かれて存在する。これらの身舎規模は同一で、宅地内の建物機能として均質性が想定される。建物規模はSB4・5と比較すると極めて小さく、これに付属する雑舎と考えられる。

次に宅地北半部の様相について述べる。北半部の中心建物であるSB54(XF11次調査)は、桁行柱列は5間分が検出しているが、この柱間をみると、中央部の3間分が8尺であるのに対し東西両端の2間は9尺と広く、これは身舎妻側に取り付く庇と考えられる。この場合、SB54を身舎2間×3間の妻側両庇とするよりも、南側は未調査ではあるが、南庇のある3面庇建物を想定する方が、宅地北半部の中心にある、その位置関係からも妥当である。SB54をこのように復元した場合、SB4・5・54の身舎東妻は直線上に揃うことになり、建物配置の基準となっていた可能性がある。また、SB55はSB54と重複してあり、建物規模もほぼ同規模と思われることから、前後関係は明らかではないがSB54とSB55は建て替え関係にあると思われる。

全体の建物配置をみると、建物群が南北の2群に分かれ、南半部の主殿(SB5)を中心に周りを囲むように建物を配置し、主殿の斜め前方の宅地の南限近くにも建物を置いている。このような建物配置は初期寝殿造ともいわれる右京六条一坊五町の邸宅(9世紀中頃)の建物配置に似る。時期的にも近く注目される。

IV期 北半部に建物がなくなり、宅地規模は4分の1町規模に縮小する。この時期の遺構に

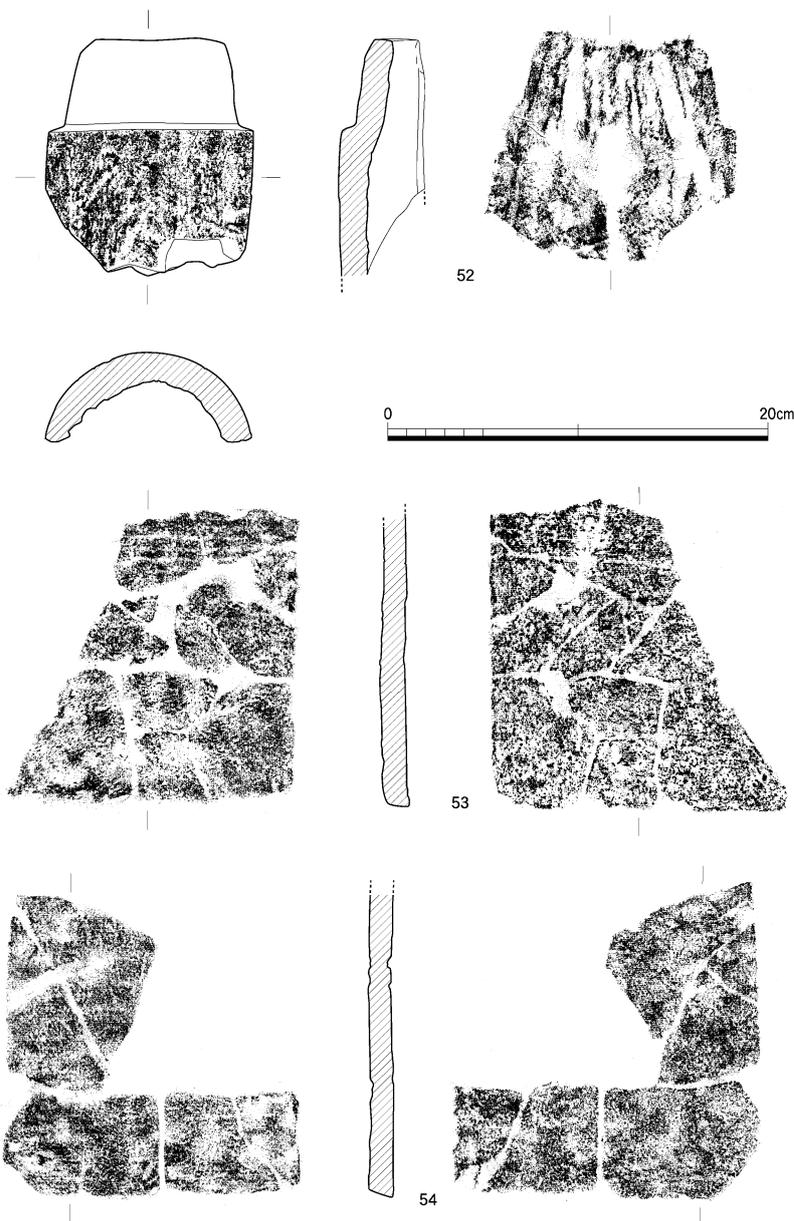


図 29 XF 7 次調査 SB 7 柱穴出土小型瓦拓影・実測図 (1 : 4)

XF 5 次調査の SE13 (図 31)、XF 7 次調査の SB 7、今回調査の建物 2・3 がある。建物方位は北に対してわずかに東に触れる。

SB 7 はこの時期の主殿となる建物で、位置的には III 期の主殿建物と重複するが、2 面庇の掘立柱建物となっており、規模は縮小し、構造も礎石から掘立柱へと変化している。SB 7 の西側に位置する建物 2・3 は、建物規模は同じである。SB 7 に付属する雑舎と思われる。IV 期と III 期の建物を比較すると、規模は縮小しているものの、建物機能ごとの配置はほぼ踏襲しているといえる。

なお、SB 7 の北庇の柱穴から小型瓦が出土しており、大棟の熨斗瓦とし



図 30 XF 7 次調査 SB 7 柱穴出土小型瓦

での利用が考えられる。十四町南東隅近くで検出している SE13 からは、井戸底部より完形の土器がまとまって出土した（図 31）。平安京土器編年Ⅱ期中～新の様相を示している（図 32）。実年代としては 9 世紀末から 10 世紀初頭であり、これが宅地の終焉時期となる。

（3）平安時代後期から室町時代

10 世紀以降、十四町内での宅地としての利用はなくなる。10 世紀から 14 世紀までの遺構は極めて少なく、この間の土地利用のあり方は明らかではない。15 世紀になると耕作地としての利用が認められる。

落込み 190 からは 11 世紀後半の土師器が出土した。堆積土は人為的な攪拌を受けており、遺構の時期としては 11 世紀以降となる。これに近い時期の遺構として、12 世紀の西櫛笥小路西側溝の SD66（XF11 次調査）がある。幅 2.2 m、深さ約 1.2 m、断面形が逆台形を呈する。周辺に同時期の建物遺構がなく、通常宅地に伴ってみられる道路側溝と比較すると、規模が大きく、形状も異なることから、異なる機能が想定される。

これまでに右京六条一坊で行われた調査では、朱雀大路から皇嘉門大路までの間で、平安時代後期から鎌倉時代前半の建物、御堂、庭園など多くの遺構が集中して確認されている。しかし、今回の調査地を含め皇嘉門大路から西側では、ほとんど遺構・遺物が検出しておらず、土地利用のあり方には明らかな違いがある。宅地以外の土地利用として考えられるものに、耕作地がある。落込み 190 や SD66 はこれに伴う可能性もある。しかし、落込み 190 から産出するイネのプラントオパールや花粉の量は少なく、水田とは断定しがたい。

今回の調査を含め、これまでの周辺の調査で、平安時代の遺構は無遺物層である基盤層で検出する。基盤層の直上には、耕作土と思われる室町時代の遺物包含層、あるいは近世の耕作土が直接堆積しており、流路内などを除くと室町時代以前の堆積層をみることはできない。今回は検出されなかったが、右京域の各所の調査で、室町時代の作土の直下、平安時代の遺構面となる基盤

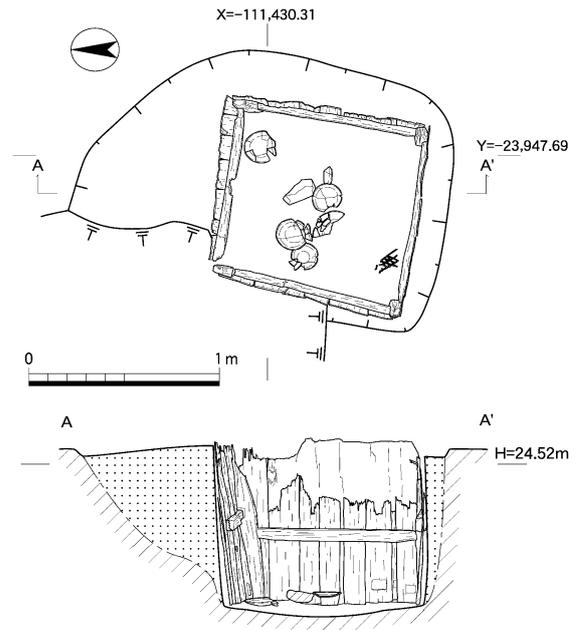


図 31 XF 5 次調査 SE13 実測図（1 : 40）

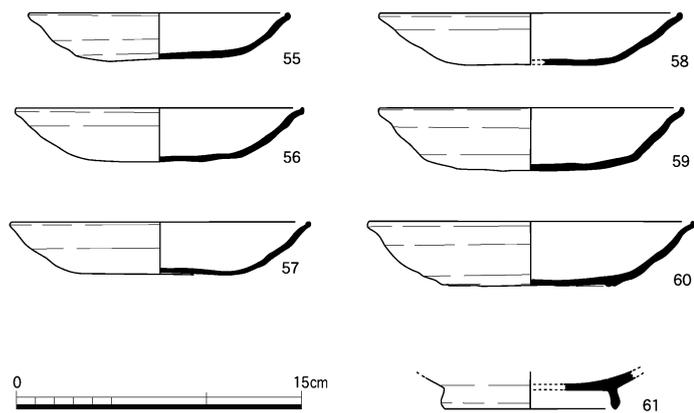


図 32 XF 5 次調査 SE13 出土土器実測図（1 : 4）

層の直上で鋤床となる礫敷を検出している。この時期、水田としての土地利用が広がったことを窺わせる。礫敷は水平を保っており、土地の削平を伴ったものと思われる。しかし、このため部分的に室町時代以前の土壌化層、あるいは耕作土と思われる土を検出することがあっても、層位的にこれらの堆積の前後関係、土壌化時期などを知ることはできなくなる。一般に平安時代中期以降、右京の多くが耕作地となると理解されているが、発掘調査によって、平安時代中期以降鎌倉時代までの右京の耕地化を証明した事例はほとんどない。今回調査の溝 95 の第 5 層は、12 世紀以降の可能性が高いが、ここからは栽培種であるソバ属の花粉が産出されている。また、右京六条一坊三町の平安時代末から鎌倉時代初頭の溝からは、イネ属・ソバ属・キュウリ属・ユウガオ属などの花粉とイネ・コムギ・ソバ・ナス科・メロン類などの種実が検出している¹³⁾。これらの一部は食用後の廃棄物の可能性もあるが、周辺の耕作地での栽培品種を反映している可能性がある。

室町時代では、基本的に耕作地となる時期である。耕作に伴うと見られる東西方向の溝が数条検出している。溝 192・193 は、楊梅小路北側溝の位置に掘削されている。水田区画として平安京の条坊区画を踏襲していることがわかる。また、土坑 94 などは墓の可能性があり、耕作地に囲まれた一部が墓地であったのかもしれない。

10 世紀以降の右京域は、都城の宅地としては衰退するが、日本最大の都市である左京域や中・近世都市京都に隣接する地理的な条件は変化しない。都市に隣接するこのような場所での耕作において、耕地整備の時期や栽培植物の品種等に、その他の地域と差異が存在したか否かは課題とすべき点と思われる。栽培品種のあり様は、食生活など都市そのもの姿を反映するものといえる。今後も堆積土内に残された花粉や種子の分析を積み重ねて、平安時代中期以降の土地利用の実態を明らかにする必要がある。

最後に 9 世紀代の様相についてまとめておきたい。9 世紀後半（Ⅲ期）では、2 分の 1 町規模の邸宅の様相が明らかとなった。宅地内の建物配置が、ここまで明らかとなった例は平安京では数例しかなく、貴重な事例となった。すでに述べたように、右京六条一坊五町の邸宅と建物配置などに類似点があり、この頃の貴族邸宅の一類型といえるかも知れない。

また、この 9 世紀後半は調査地周辺で遺構数が増加する時期である。これに関連して注目されるのは、貞観 8 年（866）の勅によって、京内の閑廢地の土地利用が促されている¹⁴⁾。北村優季氏によれば、平安京の都市政策には 2 つのピークがあり、初めは弘仁・天長年間、そしてもう一つは貞観年間である¹⁵⁾。調査地周辺の遺構のあり様を見る限り、この時期の政策は一定の成果を挙げた可能性が高いと思われる。しかし、右京全体でみると 9 世紀前半から 10 世紀まで続いて宅地利用のみられる場合と、9 世紀前半のみで宅地利用がなくなる場合と様々である。10 世紀半ばまでには、宅地としての利用がほとんどなくなってしまう右京であるが、全体を一元的に見るのではなく、いくつかのブロックに分けて、それぞれの地域において遺構の消長を見ていく必要がある。

註

- 1) 14 町内の調査については以下の報告書による。
XF 5 次調査
a 『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
XF 7 次調査
b 『平成 4 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
XF10 次調査
c 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
d 『平成 6 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
XF11 次調査
前掲 c に同じ。
e 『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
- 2) 遺跡地図では、弥生時代の遺跡である衣田町遺跡と西院遺跡の中間に位置しており、調査地は弥生時代の遺跡としては記載されていない。
『京都市遺跡地図台帳』第 8 版 京都市文化市民局 2007 年
- 3) 註 1 の c に同じ
- 4) 『平安京右京六条一坊 - 平安時代前期邸宅跡の調査 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 11 冊
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
- 5) 『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- 6) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 10 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990 年
- 7) a 『住宅公園花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報』鳥羽離宮跡研究所 1975 年
なお、この遺構は山城郡衙の可能性も指摘されているが、遺構配置や出土遺物から平安時代の宅地とするのが妥当と思われる。
b 網 伸也・柏田有香「京都府花園遺跡・西京極遺跡」『日本古代の郡衙遺跡』吉川弘文館 2009 年
- 8) 『平安京右京三条二坊十五・十六町 - 「齋宮」の邸宅跡 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 21 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 9) 註 5 に同じ
- 10) 「平安京右京六条一坊」『平成 8 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998 年
- 11) 藤田勝也「寝殿造と齋王邸跡」『平安京のすまい』京都大学学術出版会 2007 年
- 12) 註 1 文献にはこの門遺構の番号が付されていないため、今回、新たに番号を付した。
- 13) 『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- 14) 『日本三大実録』貞観 8 年 5 月 21 日甲子条
- 15) 北村優季「平安初期の都市政策」『平安京』吉川弘文館 1995 年

6. 付章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、調査1区北西端で検出された溝95形成期以降の古環境に関する情報を得ることを目的として、溝95充填堆積物および河岸の氾濫堆積物を対象として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

(1) 調査地点

調査地点の堆積層の累重状況を図33に示す。各地点の層相を以下に示す。

1) 溝95および溝95上層堆積物(1・2・4・5地点)

現代の盛土直下の堆積物は、上位より1層～26層に区分されている。1～12層は溝95埋没後の堆積物、13～21層は溝95の埋土、22～26層は溝95掘削以前の堆積物である。以下に各層の層相を記載する。

1～4層：明治時代から大正時代の競馬場跡の溝埋土である。礫および不規則に配置する亜角状を呈する泥質砂の偽礫からなる、人為的埋め戻しの堆積物である。

5～7層：灰～暗褐色を呈する泥～砂質泥からなり、上部の5層は土壤構造が発達する。滞水域で形成されたことが推定される。

9層：上部は現代の削平により消失しているが、残存部分はやや有機質に富む泥からなる。著しく擾乱されている。比較的水位の高い湿地のような状況下で形成された堆積物である。

10～12層：細粒砂質泥～泥の偽礫(ブロック)からなる人為的盛土である。上部の10層は土壤構造が発達する。上記した9層と同時期に形成された堆積物の可能性がある。

14層：大きさが不揃いな泥～泥質砂の偽礫からなる。偽礫の大きさは不揃いで、不規則に配置する。形状は亜角状をなすものが多く、人為的な堆積物と判断される。9世紀の遺物が出土する。

15層：細粒砂の葉理を挟在する小礫混じり泥質細粒砂からなる。葉理構造は生物擾乱により不連続となっている。層相から氾濫堆積物ないし溝充填堆積物と推定される。掃流作用下で形成された堆積物であり、形成時には生物擾乱が及んでいる。

16層：中礫・小礫・亜角状を呈する泥の偽礫・細粒砂が混じる泥からなる。著しい擾乱により、初生の堆積構造は不明瞭となっている。これらの層相から、16層は溝の掃流が減水し、放棄溝のような状況下で形成された堆積物であり、形成時・後に人為的擾乱が及んでいる。

17～19層：下記する22～26層を浸食する、砂礫からなる溝充填堆積物である。19層は地層の外形が不明であるものの、河床に堆積した掃流砂礫の可能性が高い。

22～26層：淘汰の悪い中礫～小礫、細礫、粗粒砂からなる砂礫層。地層の外形が不明であるため、堆積環境を特定することは困難であるが、層相を踏まえると、扇状地形成に関わった溝充填堆積物の可能性が高い。

2) 落込み190および下層堆積物(3地点)

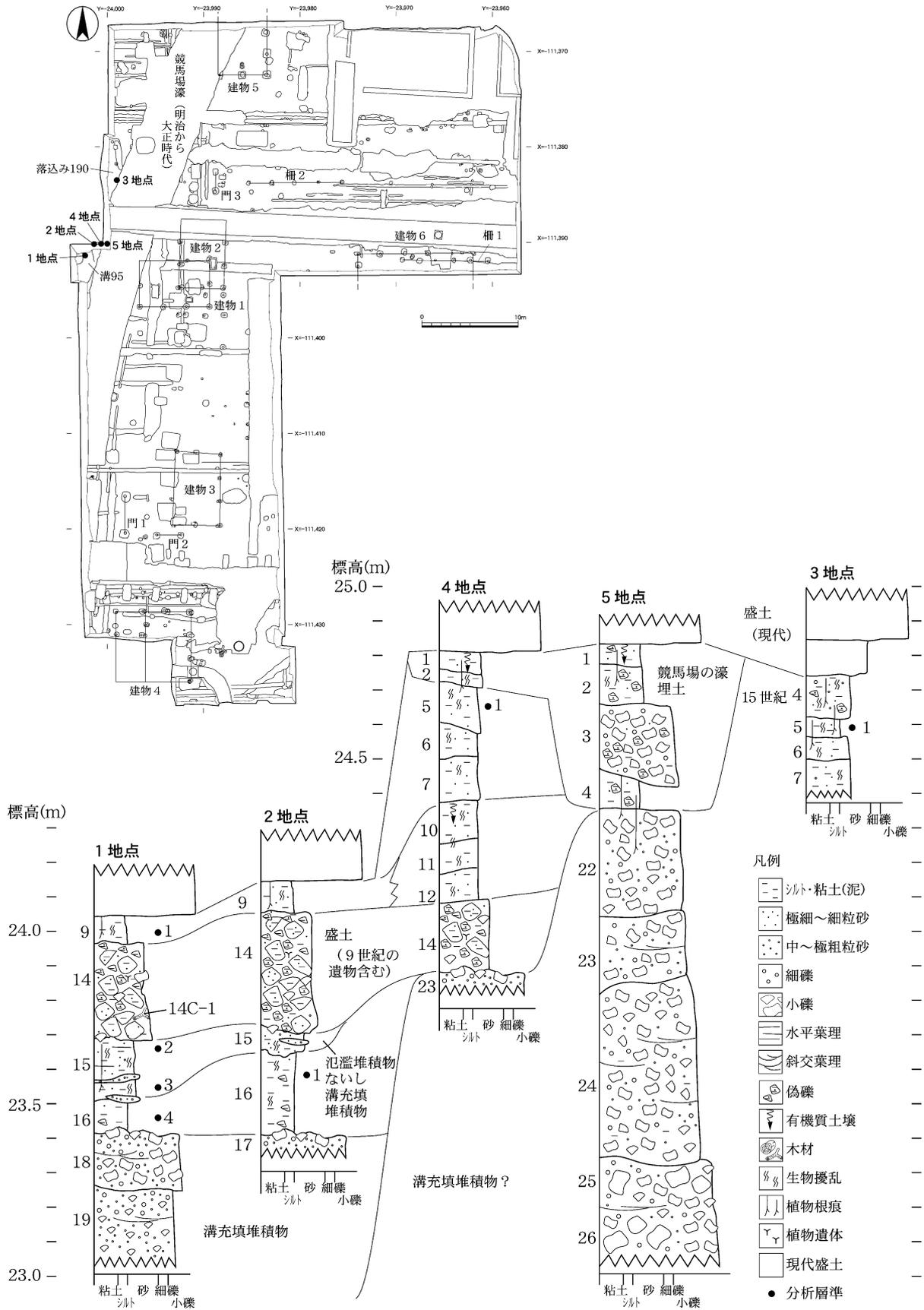


図33 調査地点の位置および層序・分析層準

落込み 190 およびその下層の堆積物である。下層堆積物は、SD34 (XF10 次調査) の河岸を構成する堆積物である。溝充填堆積物の 5～7 層と同時異相の関係にある可能性がある。6 層・7 層は著しく擾乱された泥～砂質泥からなる。5 層は区画状の凹地 (落込み 190) に堆積する、著しく擾乱されている泥からなる。4 層 (溝 191) は著しく擾乱された偽礫混じりの砂質泥からなる。発掘調査の結果、5 層から 11 世紀、4 層から 11 世紀・15 世紀の遺物が出土している。

(2) 試料

微化石分析試料は、1～3 地点から不攪乱柱状試料として採取し、室内において再度層相観察を行った後、調査目的を考慮しながら分析用の試料を採取した (図 33)。また、放射性炭素年代測定試料は溝 95 埋土の 14 層中の若年枝について実施する。

(3) 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

年代測定試料は、ピンセット、超音波洗浄機を用いて、表面付着物を物理的に除去したあと、塩酸と水酸化ナトリウムで洗浄し、試料内部の汚染物質を化学的に除去する (AAA 処理)。

試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30 分) 850℃ (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

2) 珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法 (4 時間放置) の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する

表4 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種 (海水生種)	塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種 (汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種 (淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH:Hustedt (1937-38) による	真酸性種	pH5.5以下の酸性水域に最適の出現域がある種
	好酸性種	pH7.0以下の水域に主として出現する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0以上の水域に主として出現する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上の水域にのみ出現する種
流水:Hustedt (1937-38) による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群 (小杉,1988による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35%の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35~26%の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35~12%の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12~4%の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~26%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~5%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30~12%の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2%以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2%以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2%の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群 (安藤,1990による)	
上流性河川指標種群(I)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中~下流性河川指標種群(K)	河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミスゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群 (伊藤・堀内,1991による)	
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明な種群

(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか (2005)、小林ほか (2006)などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann (1990) に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢 (2000) に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf (1993) を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別する。また、貧塩性種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種 (貧塩性種) は安藤 (1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性は渡辺ほか (2005) の環境指標種を参考とする。珪藻化石の生態性区分や環境指標种群の説明を表 4 に示す。

3) 花粉分析

試料約 10g を秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛, 比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス (無水酢酸 9, 濃硫酸 1 の混合液) 処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体の産状の層位的变化から稲作の可能性や古植生について検討するために、出現率を図示する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの含量を基数とする百分率で求めた。

なお今回は、各分類群の含量の測定も試みた。分析の際に分析試料の乾燥重量、プレパラート

作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100 個 /g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。また、植物珪酸体含量を図示する。

(4) 結果

1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 5 に示す。14C-1 試料は、同位体効果による補正を行った測定結果 $1330 \pm 30P$ を示す。暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正は、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表す。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。暦年較正值は、測定誤差を 2σ として計算させた結果、calAD 649-716 年（相対比：0.842）を示す。

2) 珪藻分析

分析結果を表 6、図 34 に示す。珪藻化石の産出数は全般的に少なく、特に 1 地点の 16 層（試料 4）は微量である。完形殻の出現率は、全試料で 40% 以下と低い。産出分類群数は、合計で 28 属 80 分類群である。以下に地点別に珪藻化石群集の特徴を下位層準より述べる。

1 地点

15 層（試料 2・3）は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の約 95% を占める。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が多産する。流水不定性で沼沢湿地付着生種

表 5 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

試料名	試料状態	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.	
					誤差	cal AD		cal BP		相対比
溝95 14層 14C-1	若年枝 (クヌギ節)	1360±30	-26.87±0.46	1330±30 (1331±27)	σ	cal AD	655 - 688	cal BP	1,295 - 1,262	0.973
						cal AD	754 - 757	cal BP	1,196 - 1,193	0.027
					2σ	cal AD	649 - 716	cal BP	1,301 - 1,234	0.842
						cal AD	744 - 768	cal BP	1,206 - 1,182	0.158

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) 暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
- 5) 暦年較正計算には丸める前の補正年代値（括弧内の値）を使用している。
- 6) 暦年較正結果は暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 7) 暦年較正年代値の統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表6 珪藻分析結果1

種 類	生態性			環境 指標種	上段：地点 下段：試料番号					
	塩分	pH	流水		1地点				2地点	
					1	2	3	4	1	
Bacillariophyta (珪藻植物門)										
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	-	-	-	-	1	
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	ind	l-ph	U	-	-	-	-	1	
Araphid Pennate Diatoms (無縱溝羽狀珪藻類)										
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	
<i>Meridion constrictum</i> Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	3	6	-	1	
<i>Staurosira venter</i> (Ehren.)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	6	-	-	1	
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	7	5	11	1	11	
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1	-	-	1	
Raphid Pennate Diatoms (有縱溝羽狀珪藻類)										
Monoraphid Pennate Diatoms (單縱溝羽狀珪藻類)										
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-	-	
<i>Cocconeis euglypta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-	
<i>Cocconeis placentula</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	3	3	-	-	
Biraphid Pennate Diatoms (雙縱溝羽狀珪藻類)										
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	9	5	-	2	
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	1	-	-	-	
<i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	1	-	-	
<i>Cymbella affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	1	-	-	
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	2	-	5	-	4	
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	-	1	
<i>Cymbella lanceolata</i> (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	-	-	-	
<i>Cymbella novaezealandiana</i> Krammer	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	1	-	-	
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	1	1	-	-	
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	2	4	-	2	
<i>Cymbella tumida</i> var. <i>gracilis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	2	-	2	
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	1	-	1	
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	7	2	1	1	
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	3	-	1	-	5	
<i>Encyonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	1	
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	6	6	4	-	6	
<i>Encynopsis neoamphioxys</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	2	-	-	
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	3	3	4	-	5	
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1	-	-	-	
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	2	-	1	-	1	
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	3	1	-	1	
<i>Gomphonema pumilum</i> var. <i>rigidum</i> E.Reichardt et Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-	
<i>Gomphonema subclavatum</i> (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	1	-	-	
<i>Gomphonema subtile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	2	-	-	
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	4	2	1	-	-	
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	2	
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.)Kocielek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	2	2	-	1	
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	1	1	-	-	
<i>Diploneis finnica</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	2	-	-	-	
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	-	-	
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	1	-	4	
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	-	
<i>Navicula constans</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	
<i>Navicula notanda</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	2	
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	3	-	-	-	-	
<i>Craticula perrotettii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	4	-	1	-	-	
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		4	1	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	2	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	1	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind		1	-	1	-	1	
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	2	-	-	4	
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1	2	-	-	-	
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	1	2	-	-	
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-	1	
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	1	-	1	
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	-	1	-	-	
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		3	-	1	-	-	
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	5	3	3	-	6	
<i>Pinnularia neomajor</i> Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	-	1	-	2	
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	1	
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	1	
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	1	

表6 珪藻分析結果2

種 類	生態性			環境指標種	上段：地点 下段：試料番号				
	塩分	pH	流水		1地点				2地点
					1	2	3	4	
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		15	7	4	2	5
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1	-	1
管縦溝類									
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	1	2	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>vivax</i> (Hantz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	2	-	1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
短縦溝類									
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ind	ind	U	1	-	1	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	1	-	-	-	1
<i>Eunotia implicata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	1	-	2	-	2
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	3	6	16	1	11
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	2	-	-	-
<i>Eunotia veneris</i> (Kuetz.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	ind	T	1	2	1	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	5	-	-	3
海水生種					0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	2	0	1
淡水生種					104	100	108	5	105
珪藻化石総数					104	100	110	5	106

珪藻の適応性

- H.R. : 塩分濃度 pH : 水素イオン濃度 C.R. : 流水
Meh : 汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種
- 環境指標種群
K : 中～下流性河川指標種, N : 湖沼沼沢湿地指標種, O : 沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)
S : 好汚濁性種, U : 広域適応性種, T : 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
R : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, RI : 未区分、伊藤・堀内, 1991)

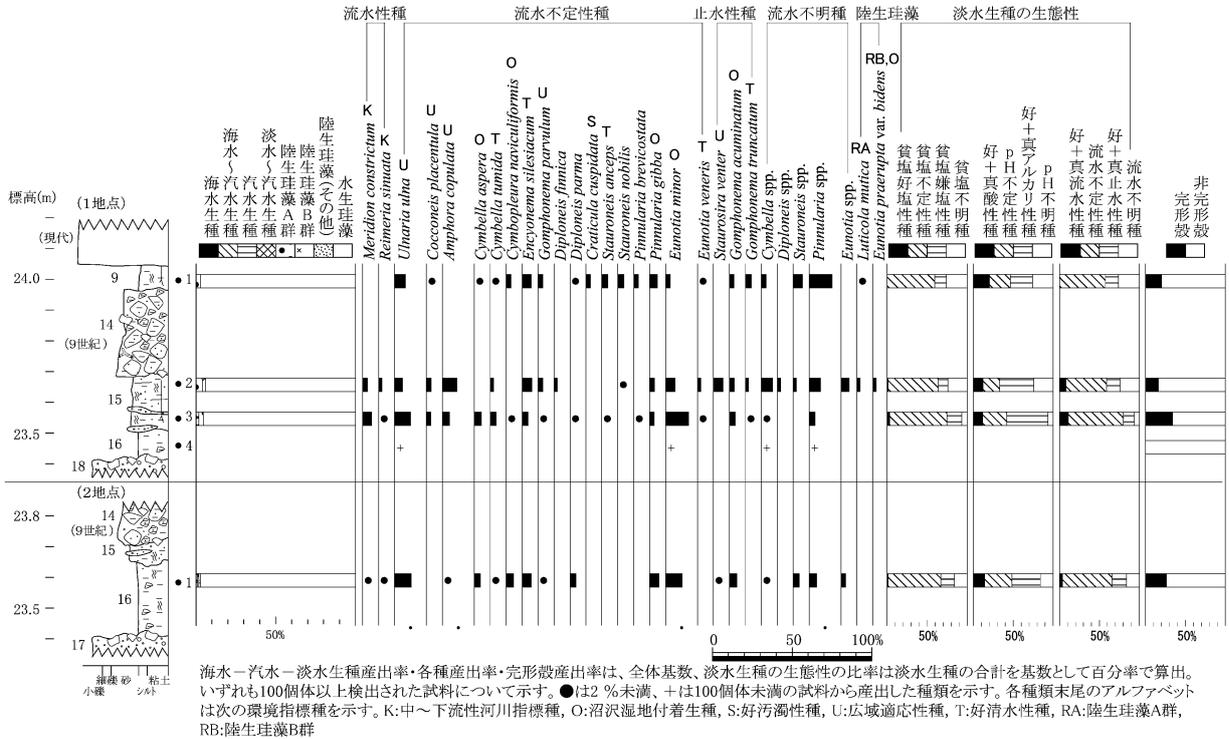


図34 主要珪藻化石群集の層位分布

の *Eunotia minor*、流水不定性で付着性の *Ulnaria ulna*、*Amphora copulata*、*Encyonema silesiacum*、好止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum*、好流水性で中～下流性河川指標種の *Meridion constrictum* 等が産出するが、際だって多産する種類は認められない。9層（試料1）は、水生珪藻がほとんどを占める。淡水生種の生態性は、真+好流水性種が検出されない以外は、試料2・3に近似する。流水不定性で付着性の *Ulnaria ulna*、*Encyonema silesiacum*、沼沢湿地付着生種の *Cymboplectra naviculiformis*、*Pinnularia gibba*、*Eunotia minor*、*Gomphonema acuminatum* 等が産出するが、際だって多産する種類は認められない。なお、化石の少なかった試料4でも、これらの種が散見される。

4 地点

5層（試料1）の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種と pH 不定性種、流水不定性種が多産する。流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、流水不定性で付着性の *Ulnaria ulna*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba*、*Cymbella aspera*、*Cymboplectra naviculiformis*、好止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum* 等が産出するが、際だって多産する種類は認められない。本群集は1地点の試料3・2の群集に類似する。

3) 花粉分析

結果を表7、図35に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出する。

1 地点

9・15・16層（試料1～4）の花粉化石群集は、いずれも類似する群集組成を示す。木本花粉ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属が多産する。その他ではモミ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、シイ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属が産出する。優占するイネ科には、栽培種であるイネ属に類する形態を示すもの（イネ属型）も認められる。その他には、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ハス属、サンショウモ等の、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。特に試料1では、ミズアオイ属の産出が顕著である。また、同じく試料1からは、栽培種であるキュウリ属も産出する。

2 地点

溝95埋土16層（試料1）の花粉群集組成は、1地点と類似しており、木本花粉ではスギ属、アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ亜属等を伴う。草本花粉はイネ科が多産し、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属、セリ科、ヨモギ属等が認められる。イネ属型も認められる。

4 地点

溝95上層堆積物である5層の花粉化石群集は、木本花粉ではマツ属（複維管束亜属を含む）が増加する。多産していたアカガシ亜属・スギ属は減少傾向を示す。草本花粉は下位層準と同様の産状を示す。

3 地点

他の地点と比較すると花粉化石の保存状態が悪く、シダ類胞子が多産する。木本花粉ではツガ属、マツ属が多産し、モミ属、スギ属、アカガシ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科等が産出する。栽培種であるソバ属も産出する。イネ属型も認められるが含有割合は少ない。

4) 植物珪酸体分析

結果を表8、図36に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、全般に保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

1 地点

植物珪酸体含量は、16層(試料4)で約4,200個/g、15層・9層(試料3~1)は1万個/g程度である。植物珪酸体群集は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。また、ヨシ属、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。試料1では、ヨシ属の産出も目立つ。

各試料からは栽培植物のイネ属が産出する。産出部位は、葉部に形成される短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体である。含量は、短細胞珪酸体が100~300個/g程度、機動細胞珪酸体が16層(試料4)で約200個/g、15・9層(試料1~3)で700

表7 花粉分析結果

分類群	上段：地点 下段：試料番号						
	4地点	1地点				2地点	3地点
	1	1	2	3	4	1	1
木本花粉							
マキ属	1	1	1	-	-	1	-
モミ属	26	11	15	28	13	14	27
ツガ属	27	7	16	15	13	9	84
マツ属単維管束亜属	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	12	8	9	3	5	15	11
マツ属(不明)	62	19	13	3	4	10	50
コウヤマキ属	4	1	3	3	2	4	5
スギ属	42	58	52	57	77	55	14
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	12	10	10	8	12	-
ヤマモモ属	2	3	1	1	-	4	1
サワグルミ属	4	1	2	3	1	1	1
クマシデ属-アサダ属	4	1	4	9	2	7	5
カバノキ属	5	7	6	4	2	4	5
ハンノキ属	2	2	-	1	-	-	-
ブナ属	5	2	4	4	2	1	3
コナラ属コナラ亜属	3	5	12	13	9	11	1
コナラ属アカガシ亜属	31	69	44	56	58	70	16
クリ属	-	1	2	-	1	-	-
シイ属	1	6	7	4	-	4	-
ニレ属-ケヤキ属	2	6	3	1	1	6	3
エノキ属-ムクノキ属	1	-	1	1	1	-	-
センダン属	-	1	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	1	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	1	-	-	1	1	-
トチノキ属	-	-	1	-	-	-	-
イボタノキ属	1	-	-	-	1	-	5
クサギ属	-	-	1	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	1	-	-	-	-
草本花粉							
ガマ属	-	-	-	1	-	-	-
サジオモダカ属	-	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	1	2	1	1	3	-
スプタ属	-	2	-	-	1	-	-
イネ科	133	170	173	141	210	174	111
カヤツリグサ科	35	9	19	23	22	20	14
イボクサ属	-	1	-	1	1	-	6
ミズアオイ属	5	89	6	2	2	5	-
クワ科	-	1	-	1	-	1	-
ギシギシ属	-	1	1	-	-	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	20	1	8	6	4	-	15
タデ属	-	-	-	1	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	5
アカザ科	3	9	1	-	-	1	1
ナデシコ科	4	3	-	-	3	2	11
ハス属	-	1	-	-	-	-	-
キンボウゲ属	1	1	1	-	-	-	-
キンボウゲ科	1	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	1	1	1	2	2	-	4
バラ科	3	2	-	-	-	-	-
マメ科	-	1	-	-	-	-	-
カタバミ属	1	-	-	-	-	-	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属	1	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	-	1	-	-	-	1	-
アリノトウグサ属	3	-	-	3	5	2	-
セリ科	8	5	2	1	-	4	2
ネナシカズラ属	-	-	-	-	-	-	2
オオバコ属	-	3	1	-	-	-	-
キュウリ属	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	24	16	2	4	2	4	6
オナモミ属	1	-	-	-	-	1	-
キク亜科	1	1	3	1	1	1	7
タンポポ亜科	11	2	3	1	1	4	8
不明花粉	18	13	12	2	4	8	9
シダ類胞子							
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	1
サンショウモ	1	1	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	94	24	19	45	41	33	288
合計							
木本花粉	238	222	209	216	201	229	231
草本花粉	256	324	223	189	255	224	192
不明花粉	18	13	12	2	4	8	9
シダ類胞子	95	25	19	45	41	33	289
総計(不明を除く)	589	571	451	450	497	486	712

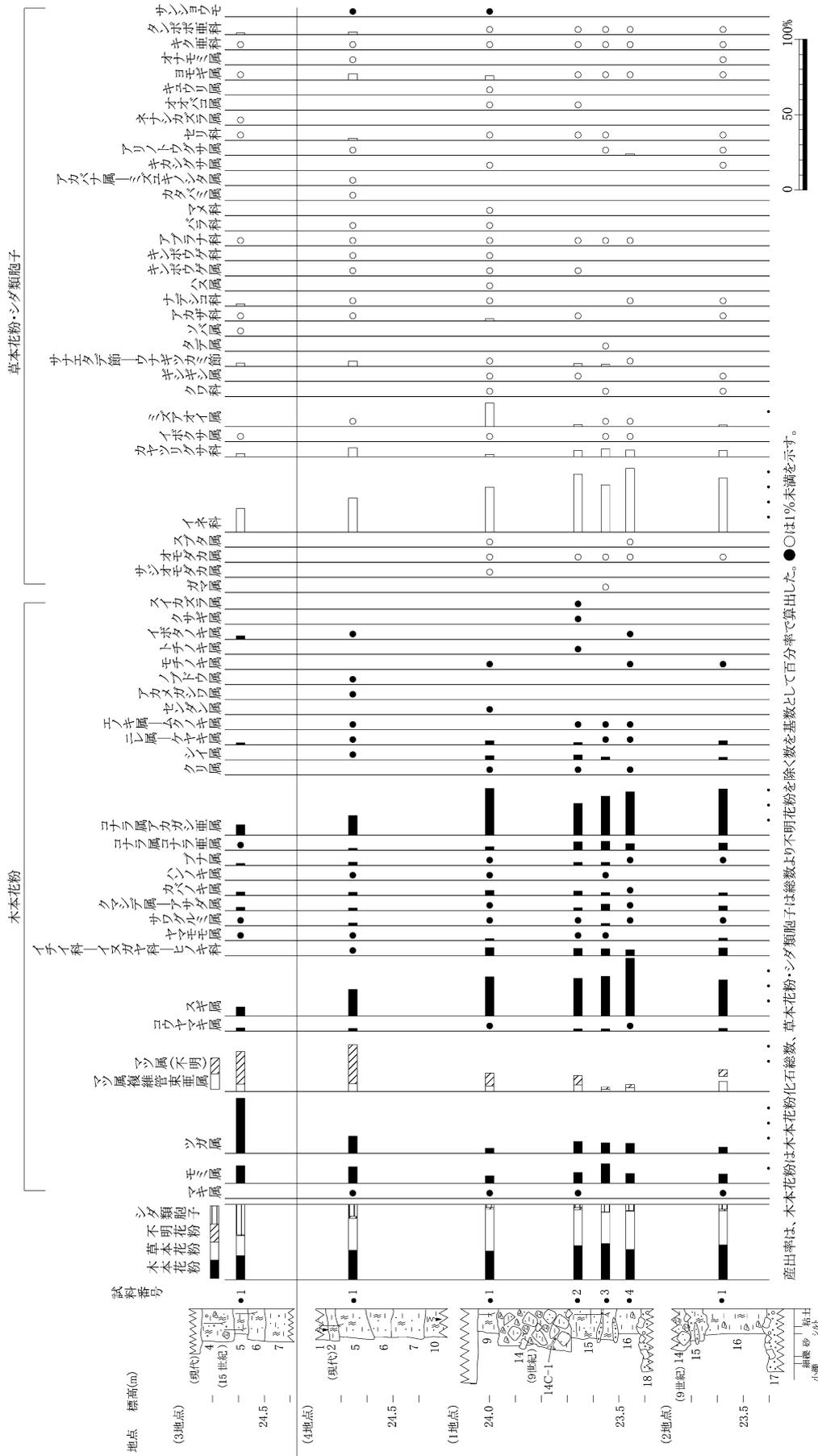


図 35 花粉化石群集の層位分布

表8 植物珪酸体分析結果

表記方法	種 類	上段：地点、下段：試料番号					
		1地点				2地点	3地点
		1	2	3	4	1	1
産出数	イネ科葉部短細胞珪酸体						
	イネ族イネ属	5	2	1	-	4	-
	タケ亜科ネザサ節	5	16	11	6	13	2
	タケ亜科	31	42	34	15	25	7
	ヨシ属	10	2	5	5	7	2
	ウシクサ族コブナグサ属	2	2	-	-	-	-
	ウシクサ族ススキ属	3	1	1	-	2	-
	イチゴツナギ亜科	1	3	4	3	5	-
	不明キビ型	6	13	3	4	11	2
	不明ヒゲシバ型	2	9	4	1	1	2
	不明ダンチク型	4	7	3	1	12	1
	イネ科葉身機動細胞珪酸体						
	イネ族イネ属	14	11	9	3	30	2
	タケ亜科ネザサ節	5	8	19	11	16	1
	タケ亜科	19	42	36	14	37	14
	ヨシ属	18	12	12	8	10	11
	ウシクサ族	8	10	10	-	12	4
	シバ属	2	-	-	-	-	-
	不明	50	21	19	11	24	21
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	69	97	66	35	80	16	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	116	104	105	47	129	53	
総 計	185	201	171	82	209	69	
含量密度 (個/g)	イネ科葉部短細胞珪酸体						
	イネ族イネ属	300	100	<100	-	200	-
	タケ亜科ネザサ節	300	800	700	300	700	100
	タケ亜科	1,800	2,200	2,100	800	1,400	400
	ヨシ属	600	100	300	300	400	100
	ウシクサ族コブナグサ属	100	100	-	-	-	-
	ウシクサ族ススキ属	200	<100	<100	-	100	-
	イチゴツナギ亜科	<100	200	200	200	300	-
	不明キビ型	400	700	200	200	600	100
	不明ヒゲシバ型	100	500	200	<100	<100	100
	不明ダンチク型	200	400	200	<100	700	100
	イネ科葉身機動細胞珪酸体						
	イネ族イネ属	800	600	600	200	1,700	100
	タケ亜科ネザサ節	300	400	1,200	600	900	<100
	タケ亜科	1,100	2,200	2,200	700	2,100	700
	ヨシ属	1,100	600	700	400	600	600
	ウシクサ族	500	500	600	-	700	200
	シバ属	100	-	-	-	-	-
	不明	3,000	1,100	1,200	600	1,300	1,100
	合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,100	5,100	4,100	1,800	4,500	800	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,900	5,500	6,500	2,400	7,200	2,700	
総 計	11,000	10,600	10,600	4,200	11,700	3,500	

含量密度は10の位で丸めている(100単位にする)。<100は100個/g未満を示す。

個/g前後である。

2 地点

16層(試料1)の植物珪酸体含量は、約1.2万個/gである。同層準とされる1地点の16層(試料4)よりも含量が多い。検出される分類群は1地点と同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。栽培植物のイネ属の葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出する。含量密度は、短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約1,700個/gを示す。

3 地点

5層(試料1)の植物珪酸体含量は約3,500個/gであり、調査した試料中で最も少なく、保存状態も不良である。産出分類群数も少なく、イネ属やタケ亜科、ヨシ属などが認められる。イネ属は機動細胞珪酸体が産出するが、含量密度は100個/g程度と低い。

(5) 考察

I 層相および化石群集からみた調査地点の堆積環境

1) 溝 95 および溝 95 上層堆積物

溝 95 埋土 16 層は、溝充填堆積物である砂礫層を覆う泥からなる。この泥層は著しく擾乱されており、初成の堆積構造は不明瞭となっている。また、垂角状をなす偽礫が不規則に混在しており、人為的擾乱が及んでいることが推定される。珪藻分析の結果、16 層からは珪藻化石がほとんど産出しなかった。珪藻は乾湿を繰り返すような堆積環境下において分解消失することが知られており、風化作用の影響により分解消失している可能性が高い。これらの層相および化石の産状からみて、16 層は溝 95 の掃流作用が減衰し、放棄溝ような堆積環境に変化し、乾湿を繰り返すような水文環境下で形成されたことが推定される。また、16 層形成期時には何らかの目的で人為的擾乱が及んだことが推定される。本層準からは栽培植物のイネ属の植物珪酸体が産出することからも、調査地点周辺での人間活動が示唆される。

16 層を覆う 15 層形成期には堆積環境が変化する。15 層は生物擾乱により不明瞭となっているが、細粒砂の葉理を挟在する小礫混じり泥質細粒砂からなり、水流下で形成された堆積物であることが推定される。また、15 層の珪藻化石群集は、際だって多産する種類がなく、沼沢湿地付着生種群を多く含む流水不定性種をはじめ、中～下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む止水性種が混在する組成を示す。このような群集組成は、沖積低地の河道充填物や氾濫堆積物でしばしばみられる組成であり、混合群集（掘内ほか,1996）と呼ばれている。以上の層相および珪藻化石群集の特徴から、15 層は氾濫堆積物ないし溝充填堆積物と推定される。15 層形成期には、調査地点の基準面が何らかの理由により上昇し、流水の影響を受け易い堆積場へと変化したことが推定される。

14 層は泥～泥質砂の偽礫からなる。偽礫は垂角状をなし、大きさは不揃いで、不規則に配置する。このような層相から 14 層は人為的に攪拌された堆積物ないし人為的な盛土と判断される。14 層から出土する遺物の年代から、9 世紀頃の人間活動に起因するものと判断される。なお、本層中に取り込まれていた若年枝の暦年較正年代は calAD 649-716 年（相対比：0.842）を示し、遺物の年代と異なるが、これは本層が人為的埋土であることと調和的である。

14 層の人為的埋土の上位に累重する 9 層は、やや有機質に富む泥からなる。著しく擾乱されており、微細な偽礫が混じる層相をなす。本層中の珪藻化石群集も混合群集の様相を呈するが、15 層の群集とは流水生種をほとんど伴わない点で異なる。氾濫堆積物以外にも耕作土など的人為的擾乱が及んだ堆積物でも混合群集が確認される場合がある（掘内ほか,1996）。また、沼沢湿地付着生種群を多く含み、陸生珪藻の産出が少ないことから、氾濫により堆積物がもたらされた後すぐ離水するような環境ではなく、湿った状態が続いていたと推測される。以上の層相および珪藻群集の特徴から、9 層形成期には調査地点の基準面が上昇し、湿地のような堆積環境に変化したことが推定される。9 層からは遺物が出土しないが、花粉化石群集の特徴から 12 世紀末以前に形成された堆積物であることが推定される。

9層の上位は、大部分が現在の攪乱の影響を受けているため不明瞭となっているが、溝河岸近くでは9層の上位に畔状の高まりをなす10層が形成されている。この10層は著しく擾乱された砂質泥層からなり、土壌化していることが窺える。

10層の上位には、再び砂質泥からなる8～5層堆積物が累重する。この層相変化から、9層形成期以降、10層形成期のような土壌発達する時期を挟むものの、基本的には湿地のような堆積環境が継続していたことが推定される。最上部の5層では土壌構造が確認されるようになることから、5層形成期には地下水位が低下した可能性がある。5層の形成時期は、花粉化石群集の特徴から、12世紀末以降と推定される。

2) 落込み190および下層堆積物

溝95河岸(3地点)の7～5層は上方細粒化する砂質泥～泥からなる。溝95埋土上部の5～7層と同時異相の関係にある可能性があるが、現代の攪乱により溝埋土との層位関係を確認することができておらず、詳細は不明である。層相は、6・7層が著しく擾乱された泥～砂質泥、5層が著しく擾乱されたやや腐植を含む泥、4層は著しく擾乱された偽礫混じりの砂質泥からなり、5層から11世紀の遺物、4層から11世紀および15世紀の遺物が出土している。これらの層相から、5層は人為的に攪拌された堆積物であり、4層形成期の擾乱も多少なりとも受けていることが推定される。

II 花粉化石群集の特徴

溝95埋土の花粉化石群集は5層で層位的に変化する。16層～9層では針葉樹のスギ属および常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産するが、5層になると針葉樹のマツ属が増加し、スギ属・アカガシ亜属は減少傾向を示すようになる。

このようなマツ属の増加傾向は、平安京域で行われてきた植生史調査成果でも確認されている(パリノ・サーヴェイ,1991・2008,環境考古学研究会,2002。2004)。増加時期については、大覚寺大沢池堆積物の結果から、12世紀～14世紀にかけて起こっていることが確認されている(未公表)。また、今回の調査区の東側350mに位置する平安京右京六条一坊三町の調査区の12世紀末の溝埋土の花粉化石群集において、マツ属が多産することが確認されており、この多産傾向が地域的な植生変化を反映しているとすれば、マツ属の増加が12世紀後半に急激に起こっている可能性があることが指摘されている(パリノ・サーヴェイ,2008)。

今回の溝95埋土5層の形成年代は不明であるが、花粉化石群集の層位変化から12世紀末以降と推定される。

III 調査区周辺の植生

1) 溝95埋土16層～9層形成期

本時期の花粉化石群集をみると、木本花粉に比べ、草本花粉の割合がやや高く、その種類構成が豊富であることが特徴として認識される。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ク

ワ科、ギシギシ属、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属など、人里植物や荒れ地に普通な種類が産出している。また、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ等の日当たりの良い水湿地を好む種類も産出する（これらの水生植物は、近年は農薬等の影響で減少しているが水田雑草としても普通にみられる種類でもある）。一方、局地的な植生を反映する植物珪酸体の産状をみると、ネザサ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科など開けた草地を形成する種類のほか、ヨシ属、コブナグサ属といった水湿地に分布する種類が産出する。上述の溝 95 埋土の堆積環境を踏まえると、堆積環境が静穏な 16 層・9 層形成期の溝沿いは基本的に開けた環境であり、これらの草本植物からなる草地が形成されていたものと思われる。また、溝内には水湿地も点在し、水生植物が生育するような環境も存在したと考えられる。

渡来種に着目すると、花粉化石では、9 層からハス属（諸説ある）、キュウリ属が産出する。これらは、周辺での栽培や植栽に由来する可能性がある。一方、植物珪酸体では、各層からイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が産出する。上述の堆積環境を踏まえると、集水域からもたらされた珪酸体が集積しているとみられることから、各層形成期には調査区周辺において稲作が行われていた可能性がある。また、水田雑草となりうる水生植物の花粉化石が豊富に産出することから、これらの一部は水田に生育していたものに由来する可能性がある。なお、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料 1 g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いとされる（杉山,2000）。今回はこれより低く、遺構の状況や堆積機構から考えても、周辺の稲作地から流入したことが示唆される。

木本花粉では、スギ属とコナラ属アカガシ亜属が多産する。アカガシ亜属は、ヤマモモ属、シイノキ属等と共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、これらは、周囲の山地に森林を形成していたと考えられる。スギ属は谷沿いや湧水地等の適湿地に林分を形成する種類である。この他、針葉樹ではモミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科等も産出する。これらは扇状地面、谷頭、斜面地など土壌流失が起きやすい等、土地条件の悪い場所で更新する種類である。また、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、トチノキ属等の落葉広葉樹は、河畔や林縁等に生育する種類である。これらの樹木も環境勾配に応じて分布していたものと思われる。

2) 溝 95 上層堆積物 5 層および落込み 190 形成期

溝 95 上層堆積物 5 層の花粉化石群集は、木本花粉のマツ属が増加することが特徴である。上記したように 12 世紀末以降の植生を反映している可能性が高い。マツ属は二次林の代表的な樹種を含む分類群であり、5 層形成期以降、周辺の森林植生に対する人為的攪乱の様相が変化し、陽樹であるマツ属が分布を拡げたことが推定される。一方、調査区近辺は、草本花粉が多産することから、草地が卓越する開けた場所であったことが推定される。ソバ属花粉が産出することからソバ栽培なども周辺で行われていた可能性がある。

溝河岸の区画状の凹地（落込み 190）を埋積する 5 層形成期も、花粉化石群集の特徴から、基

本的には溝 95 上層堆積物の 5 層形成期と同様な植生が推定される。なお、落込み 190 からは、溝 95 地点に比べて草本花粉の割合が少ないが、これはシダ類胞子の割合の増加に伴い、相対的に減少しているように見えるだけであり、組成は溝 95 地点と大差ないと判断される。花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なり、落葉広葉樹よりも針葉樹やシダ類胞子の方が風化に対する抵抗性が高い（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998 など）。針葉樹の木本花粉が比較的多産することも考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉が風化作用の影響を受けている可能性がある。また、本層における植物珪酸体も産出個数が少なかったが、花粉化石と同様、風化作用の影響により減少している可能性があり、栽培植物のイネ属珪酸体も減少している可能性がある。このことをおよび区画状の凹地を埋積する 5 層が人為的攪拌が及んだ層相を示すことから、区画状の凹地は耕作地として土地利用されていた可能性も考えられる。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 堀内 誠示・高橋 敦・橋本 真紀夫,1996,珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について.一混合群集の認定と堆積環境の解釈-,日本文化財科学会,第13回大会研究発表要旨集,62-63.
- Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
- 環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,33-47.
- 環境考古学研究会,2004,溝 64 の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,榎内田老鶴圃,531p.
- 近藤 鍊三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMEER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora vonMitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,

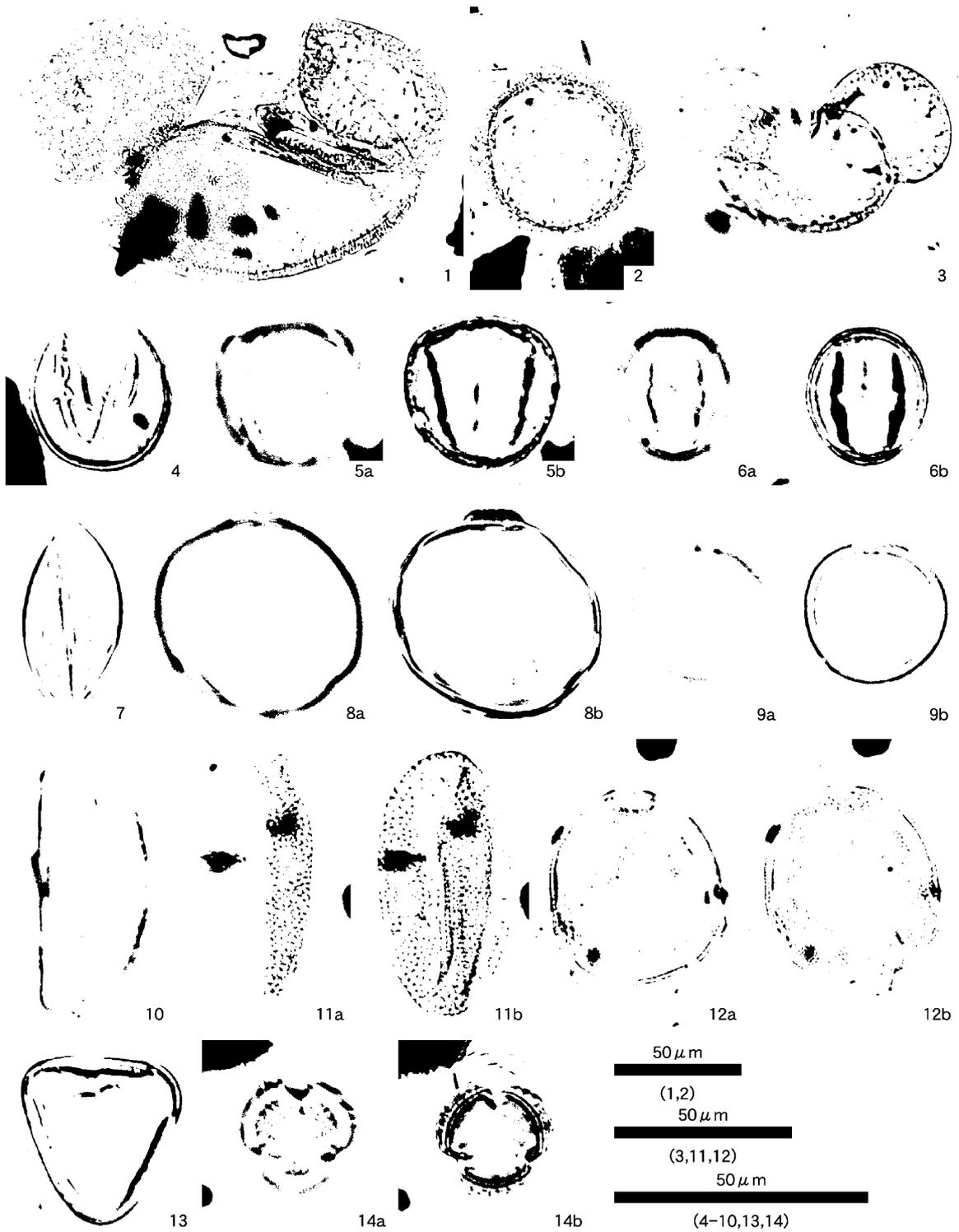
- Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.
- In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告, 平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町, 京都文化博物館, 108-116.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 6. 付章 自然科学分析. 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7 平安京右京六条一坊三町跡, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 39-62.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学 3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
- 渡辺 仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, 666p.
- 柳沢 幸夫, 2000, II -1-3-2-(5) 計数・同定. 化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.



10 μm (1,3,4) 10 μm (2,5-11)

1. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve (1地点; 3)
2. *Pinnularia brevicostata* Cleve (1地点; 1)
3. *Ulnaria ulna* (Nitzsch) Compere (2地点; 1)
4. *Cymbella tumida* var. *gracilis* Hustedt (2地点; 1)
5. *Encyonema silesiacum* (Bleisch) D.G. Mann (1地点; 1)
6. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg (1地点; 3)
7. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (1地点; 3)
8. *Amphora copulata* (Kuetz.) Schoeman et R.E.M. Archibald (1地点; 3)
9. *Eunotia minor* (Kuetz.) Grunow (1地点; 3)
10. *Meridion constrictum* Ralfs (1地点; 3)
11. *Reimeria sinuata* (W. Greg.) Kociolek et Stoermer (1地点; 3)

图 37 珪藻化石



- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. モミ属(1地点:1) | 2. ツガ属(1地点:2) |
| 3. マツ属(1地点:1) | 4. スギ属(1地点:1) |
| 5. コナラ属コナラ亜属(1地点:2) | 6. コナラ属アカガシ亜属(1地点:1) |
| 7. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(1地点:1) | 8. イネ科(イネ属型)(1地点:1) |
| 9. イネ科(1地点:1) | 10. ミズアオイ属(1地点:1) |
| 11. ソバ属(3地点:1) | 12. キュウリ属(1地点:1) |
| 13. カヤツリグサ科(1地点:1) | 14. ヨモギ属(1地点:1) |

図 38 花粉化石



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(1地点;2) | 2. ネザサ節短細胞珪酸体(1地点;2) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;3) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体(1地点;1) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(1地点;1) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点;2) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;1) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;3) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(2地点;1) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(3地点;1) |
| 11. ネザサ節機動細胞珪酸体(1地点;2) | 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点;3) |
| 13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(1地点;2) | 14. シバ属機動細胞珪酸体(1地点;1) |

図 39 植物珪酸体

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょういちぼうじゅうよんちょうあと							
書名	平安京右京六条一坊十四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-22							
編著者名	南 孝雄・モンペティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょういちぼう 六条一坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ちゅうどうじあわたちょう 中堂寺粟田町 ちない 地内	26100		34度 59分 44秒	135度 44分 14秒	2008年10月 3日～2009 年3月19日	1,950㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 六条一坊 十四町跡	都城跡	弥生時代	溝					
		平安時代前期 ～中期	建物、門、柵、溝	土師器、須恵器、緑釉 陶器、瓦類、木製品				
		平安時代後期	落込み、溝	土師器、軒丸瓦				
		室町時代	土坑、溝	土師器、漆器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-22
平安京右京六条一坊十四町跡

発行日 2009年6月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961